

---

# 異世界へよーこそ ~ Door to Sameruda ~

Reliah

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界へよーこそ〜Door to Sameruda〜

### 【Nコード】

N2298H

### 【作者名】

Reliah

### 【あらすじ】

ある日、親友の小唄と早めに行った移動教室。だが、いつまでもつても授業ははじまらず、その上いつの間にか知りもしない場所に二人で投げ出され。異世界セイムルダで、高校生二人の冒険が始まる。ノノ携帯だけで描いてみようシリーズ（たまたにPCで修正だけします）。タイトル通り異世界トリップファンタジーです。ほんのりBL要素アリ。

## #001：唐突な異変

早朝の登校ルートには、相変わらず遅刻しそうな学生が走っていたり、その横を自転車で余裕ぶっこいた学生が颯爽と通り抜ける。そんな中、俺 倭 圭一は、やっぱり例に漏れず遅刻寸前組の仲間入りをしていた。

「ちつくしよー、ねえちゃんに捕まらなかつたらこんな事には……！」

走りながら思わず本音が出る。学校はもうすぐそこだが、最後の難所である急な坂が立ちはだかる。正直ここで脱落するやつはかなりいる。

……が、負けるもんか、これでも毎日無遅刻無欠勤の皆勤賞なんだぜ。こんな坂もう

「お前ら、門を閉めるぞ。さっさと来い！」

なんだとおおおお！？

今何分だ？まだ51分じゃないか。まずあり得ん、門が閉まるのは8時ちようどのはずだ。これは富永（意地の悪くい体育教師！みんなの嫌われもん！）の罠か！？

「くおら富永アアア！」

俺は多分今までにないくらいの全力疾走で坂を上りきり、目をまん丸にした富永の前に詰め寄った。もちろん、既に校門は越えている。

「な、な、なんだ倭！今のは100M12秒どころの早さじゃなかったぞ！？」

「ごまかすなよテメエ、今何分だと思つてやがる！門が閉まるのは8時ちようどだろうが！」

富永の主に走りに対する俺へのコメントは軽く無視。詰め寄って問いただせば、そんなはずはないぞと自分の腕時計を見せてきた。

「……富永、アンタなあ。これ5分早いだろ」

「なんだと？携帯もこの時間なんだぞ！」

さらに携帯を見せようとごそごそポケットを探る富永に、俺は決定打を与えてやった。

「アレを見るよ」

「む……」

校舎のてっぺんで輝く時計。その針は間違いなく、7時55分を指していた。

「いやー間違いとはいええ、俺が富永を押さえといってくれなかったら一巻の終わりだったぜ」

教室に入って疲れを癒していると、机に冷えた缶コーラが置かれる。

それをおいた人物を見上げ、俺は軽く手を挙げた。

「よお、おはよ。今日は遅刻じゃねーのか」

「倭のおかげでな。しっかし富永じゃないが、お前本気出したらマジで陸上部のエース堅いんじゃないか」

多分今日の俺のあの坂道疾走のことを言ってるんだろう、相手

雅 みやび 小唄 こいつた はニコニコしながら俺の肩を叩く。

「まーあれくらいは、本気出せばな。ところでこれ、くれんの？」

さりげなく偶然を自慢するかのように装い、俺は目の前のコーラを指差して話題転換する。小唄はニコニコしたまま、もちろんと頷いた。

「今この教室にいられんのもお前のおかげ！このくらい安い投資だぜ」

「投資ってなあ……俺は株券じゃねーぞ」

あからさまに笑みの張り付いた小唄に、コーラを開けながらこいつ向きの冗談で返す。小唄の実家はミヤビコーポレーションとかいう大企業で、主に貿易関連で活躍している。が、こいつが子会社の

雅ファンド たしか投資関連の会社 の社長だつていう話はあんまり知られてない。

「俺的にはお前は株なんてもんじゃなく、国債みたいな堅実なもんだと思うがね」

ちちち、と指を振る小唄。が、俺にはそのあたりから単語の意味が全く解らん。

「国債てなんだよ？グローバルなんたらとかか？」

「いやいやいやそりゃ違う、株とは違ってだな……」

「授業をはじめますよー」

必死に俺向けに説明を考える小唄を遮り、教師が入ってくる。仕方なくとばかりに隣の席に座る小唄を後目に、俺はコーラを飲み干した。

雅 小唄はなかなかの美形として校内どころか他校でも名が知られていた。昼休みに小唄の席の周りに群がる女生徒たちに、俺は軽く胸焼けを起こす。

キヤーキヤー言うのはまだいい、色気のもりか香水やら化粧の匂いがハンパない。正直化粧品匂いには姉貴で慣れてるが、ここまで来れば異常だ。

俺はげんなりしながら席を立ち、女の子に囲まれて顔すら見えないう小唄に声をかける。次は移動教室だ。

「少し早いけど俺、先行くわ。席取つといてやるから」

「えー！待つてよ俺も行くから！」

案の定慌てて教科書を用意する小唄に、周りの女生徒たちがえー、と残念そうな声を上げる。なんとというはた迷惑。

「まだいいじゃない、小唄くんの話聞きたい」

「ごめんね、早く行かないと良い席埋まっちゃうんだ！」

やんわりと女の子を宥めつつ、小唄は俺に行こうかと言って肩を叩く。頷いて、俺は教室から足早に立ち去った。

まだ人がいない理科室の机の上、溜息を吐いて小唄が突っ伏した。その机、薬品染み付いてんだが。

「助かったよ……」

「嫌なら拒絶すりゃいいだろ？」

お人好しのこいつがどう答えるかなんて知っていたが、あえて言ってみる。案の定、答えは同じだ。

「いや、好意を持ってくれんのはありがたいからさあ」

そらきた、だからいらん噂が立つんだ。

小唄は男女関係なく誰にでも優しい。そしてとりわけ顔も良い。細目がちでやや切れ長の目は、毎日ニコニコしているせいか鋭い感じはしない。加えて、アメリカ人の父親譲りのくすんだ金髪、特徴的な灰色の目。確かに、日本人にはないタイプの、だが好まれやすい美形だった。

対して俺は、こいつより身長が低い。自分では顔も普通で、こいつよりかは学生らしい。ようは子供じみた外見だと思う。ただひとつ、髪が赤いくらいが他とは確かに違う。母方の遺伝らしいが、よくは知らない。それにしたって、俺と小唄が並ぶとさぞかしカラフルなことだろう。

「嫌なもんは嫌って言わないと、いつか痛い目見るぞ。女は怖いからな」

ある意味比べるのはどうかとも思うが、俺は唯一の家族である姉貴を思い浮かべる。姉というより母親みたいな立場だが、正直言っているんな意味で洒落にならないことばかりしてくれる。今日遅刻しかけたのだからそれが原因だ。

「まあそりゃそうだけど……かといってなんて言うべきかもわからないし」

肩をすくめ、小唄は苦笑する。気持ちは解らないでもない。

そんな他愛ない話をしてしていると、ふと教室が未だに静かなことに

気付く。

時計を見れば、既に授業が始まっていても良い時間。小唄もそのことに気付いたのか、手にしていた時間割を見ながら首を傾げた。「急に教室が変わったにしても、変だよな？普通張り紙とか貼りに来るはずだし」

まず当たり前のことを言う小唄に、俺は頷いてあたりを見回す。気持ち悪いくらい物音が感じられない教室は、沈黙の「音」すら聞こえない。

「……っか、この隣、美術室じゃないか？たしか隣のクラスが授業やってるはずだろ？」

俺の言いたいことに小唄も気付いたのか、やや不安そうに眉をひそめる。席を立てて教室を見渡しても、まったく変化はいや、あった。

「なんだ、これ？」

教室の中心に当然の如くあった「それ」に、何故今まで気付かなかったのか。いや、もしかするとたった今出現したのかもしれないそれは、藍色の 人の頭くらいもある宝石のように見えた。

が、それがただの宝石でないのは、俺でなくても解る。種も仕掛けもおそらく無く、そいつは浮いていた。

「綺麗、だな」

ぼそりと、小唄が呟く。そこに関しては異論はなかったが、俺も小唄もその「宝石」に近寄りたくはなかった。本能と言うべきか、この宝石に近寄れば何か良くないことが起こりそうな

そんな事を考えていると、ぐい、と身体が引っ張られた。慌てて小唄を見れば、同じような感覚を受けたのだろうか、困惑した様子でこちらを見ていた。

「い、今引っ張っ……」

「俺じゃないぞ……」

さすがに俺も小唄も、不安は隠せない。小唄の腕を掴んで教室から出るように促すが、その瞬間、先程以上に強い力で体を引っ張ら

れた。

そのあとのことは、あまり理解できなかった。

何かを突き破るような感覚、そして落下するときに感じる、胃がすくむような感覚。そこで今落下していると理解すると、しっかりと手を握る誰か たぶん小唄だ を認識した。

うつすらと目を開くような余裕もない。手を握る相手を引き寄せようと目を瞑ったまま腕を突き出すと、制服の裾らしきものが手に引っかかる。夢中でそれを掴んで、離れないよう引き寄せた瞬間また、何かを突き破った。

どさりと、落下時間にしてはかなり軽い衝撃ではつとずる。たとえるならばそれは、足を引っ掛けて転んだくらいの衝撃。

もう落下していないとわかり、俺は目を開く。真っ先に入ってきたのは灼けるような太陽の光で、瞬時に目を反らした。視界の端に、見慣れた金髪が映る。そこでようやく、俺は小唄がいることに安堵した。

「おい、小唄。大丈夫か？」

半分俺に覆い被さるように倒れている小唄を助け起こし、べちべちと頬を叩く。うう、と月並みな呻きを上げて、小唄はうつすら目を開く。

「よし、生きてるな」

「生きてるよそりゃ……この歳で死んでたまるか」

溜息を吐いて起き上がり、小唄はあたりを見回す。それにつられて、俺も周囲を見渡した。

「……なんだ、ここ」

立ち上がり、服の埃を払いながら見渡す。視界には、石造りの古



びた建物と、広大な海が広がっていた。

「マヤ文明とかエジプトみたいだな。神殿……にしてはもう、かなり古そうだし、使われてなさそうだけど」

確かに、小唄の言うように建物の一部は崩れかけ、テレビなんかでチラッと見たような古代文明の遺跡と通じるものがある。今居る場所はさしずめ玄関みたいなものか、すぐそこには建物の中に続く階段と、その上に天井があったことを示す柱があった。

「かなり崩れてるな……中に入っても意味はないかもな」

溜息を吐いて、俺は肩をすくめる。小唄は少し神殿に興味があるようだが、それ以前に状況を把握するほうを選んだのだろう、小さく頷いて同じように溜息を吐いた。

「、、」

ふと、俺の耳元を何かの声がかすめた。

鈴みたいなの、凜とした、だが儂い声。

なんて言ったのか　もう一度、と考えれば、不思議ともう一度、その声が耳についた。

「神殿……へ……?」

「……倭?」

驚いた様子で、小唄が俺の呟きに反応する。小唄にも、あの声は聞こえていたのかも知れない。

「中に入れ　って、聞こえたよな?」

「」

そう呟けば、小唄は沈黙する。多分、同じ事が聞こえたんだろう。

「……なんかちよつと怖くないか?」

眉をひそめ、小唄は呟く。考えるまでもなく、不可解だし気持ちが悪い。が、これ以外情報といえるものは実際のところ無い。

「……危なくなったら逃げるってことで」

「ま、マジか……」

泣きそうな顔で小唄が肩を落とす。変なところで、こいつは小心者だ。

「……嫌ならここ居てもいいぞ」

実際人気のないこの場所なら、留守番でも差し障りない。そう思いながら言えば、小唄はいやいやと首を振って俺の腕を掴む。

「こんなところで独りとか有り得ないって、マジで」

相変わらず予想できる答えに、俺は苦笑して歩き始めた。

## #002：異世界セイムルーダ

神殿の奥は、薄暗いながらも不思議と周囲がしつかり見えるように窓が作られていた。これが映画やゲームなら、まず間違いなくその辺の小部屋からゾンビやらミイラでも出てくるところなんだが。

流石にそんな展開はなく、自分の足音にもビビったりする小唄こつたを引っ張って奥へ歩く。目的地がどこかは解らないが、たまに耳に響くあの「声」が、行き先を示すように動いていく。不思議だが、それに従っていけば扉が閉まっている場所でも難なく通れたりする。たいていの扉は開けてみようとしても鍵らしきものがかかっている開かないが、そこだけは開くわけで。

頭の中で地図を作りながら、俺は導かれるままに歩いた。

最初は泣きそうな声で弱音を吐いていた小唄も、今ではすっかり静かについてきている。ビビってはいるみたいだが。

「……しかし、でかい神殿だな」

素直な感想をつければ、小唄がそうだねと周りを見る。もうずいぶん歩いた気がするが、内部はかなり広く、地下へと続いているようだった。

階段を下りた回数で考えれば、ここは最初にいた場所から地下5階分くらいはあるはずだ。が、窓の外に海が見えるあたり、段差がある場所にも建てられているらしい。

「あ」

唐突に、行き止まりになった。薄暗いが、目の前の壁らしきものがかなり大きな扉と気付く。細かな装飾がかなりゴテゴテとデコラティブっていうんだか、そんな感じで飾り付けられている。

> i 1 3 1 3 — 2 1 2 <

「マヤもエジプトも違うな。どっかで見たような装飾なんだけど」  
小唄が装飾に触れながら呟くが、正直俺には古代文明なんてみんな同じに見える。ロマンみたいなもんを感じないことはないが、違

いまでは解らない。

「ところで、この扉……他よりかなりでかいし、豪華だよな。もしかして、奥までたどり着いたんじゃないか？」

かなり 間違はなく3階建ての建物より巨大な扉を見上げ、俺は半ば独り言のように呟く。半分は小唄に向けて、半分はあの声の主に向けて。

「

開ける、と声が聞こえる。その声に従って扉を押そうとすると、小唄が慌てて俺の腕を掴んだ。

「待ってよ、ほんとに開けるの？」

「他にやることもないだろ？」

怯えているのか泣きそうな小唄に、俺は溜息を吐いて扉から手を離す。

「こんまま引き返しても何も変わらないだろうし、もしかしたらさつきから話しかけてるやつがいるかもしれない」

「そうだけど……」

後込みする小唄を理解できないわけではないが、俺は純粹に扉の奥に興味があった。それで何もなかったとしても、他に何か手掛かりくらいは見つかるのではないかと。

まだ何かぶつぶつ呟く小唄を後目に、俺は扉を思い切り押した。

が

「……重っ」

よくよく考えれば、扉は石と金属でできている。さらにかんりの高さがあるそれが重いのも、なかなか開かないのも、そりゃ当たり前前の話だ。

「倭やまとの怪力でも開かないの？」

怪力ってなんだよ、怪力って。そりゃあ今時の高校生なんかよりかなり鍛えてはいるけど、所詮は高校生。こんなもんだらう常識的に。

「お前は俺を何だと……」

溜息を吐いて、俺は思い切り扉を蹴りたくる。重い扉はそれでもびくともしない。

ふと、こんな扉を作った奴らは押し開けたりなんてしていただろうか？そんな疑問がよぎる。昔の日本の城でも、でかい城門の横に小さい扉があった気がする。

「なあ小唄、あっち調べてみてくれ。俺はそっち。他にドアとかあるかもしれない」

「あ、そうか。こんな簡単に開くわけないもんね」

俺の言いたいことを理解したのか、小唄は頷いて扉の横に走り寄る。俺もその反対側に向かい、案の定存在した小さな扉を発見した。

「あっちにはなんにも」

すぐに、小唄が戻ってくる。そして目の前のドアを見ておおと声を上げた。

人間の平均身長より高く作られた程度の扉は、俺なら難なく蹴り破れそうだった。巨大な扉の装飾を模しているのか、扉には細やかなディテールで彫刻が施してある。

「全体像は女の子の装飾なんだね」

小唄が言っているとおり、扉には翼の生えた少女が掘られていた。イメージというやつか、女神だとか聖女みたいな印象を持つ彫刻は、ここがどこか解ってさえいれば見惚れていたんだろう。

が、俺はあの声の主のことが知りたかったし、ここはどこなのか、俺たちが元の場所に帰れるのか知りたかった。すべてとは言わなくても、この先で重要なことが解るような気がする。

意を決して、俺はその扉を押す。意外なほど軽い扉が、きしんだ音をたてて奥へ開いた。

内部の光景に、俺たちは思わず感嘆の声を上げた。

まず目に付いたのは、一番奥にあるステンドグラス。緑系統の色合いを意識して作られたそれは、完成まで相当な時間が掛かったん

だろうと思う。

涼しげなガラスの向こうからさす光のせいで、まるで森の中に居るみたいな錯覚を覚えた。

「……礼拝堂……かな？」

小唄の呟きに、俺はなるほどと周囲を見渡し納得する。広い空間の下の方　つまり地面は、沢山の椅子が整列し、真ん中に絨毯が敷いてある。風化しかけたそれにも、綺麗な刺繍の名残があった。礼拝堂という認識は正しいのかもしれない、一番奥にはステンドグラスを避けるように、ピアノが配置されその手前には祭壇があった。

「……あの祭壇の像、入り口の女の子じゃない？」

小唄の指差す場所を見れば、確かに祭壇に飾られた崩れかけの像は入り口の扉の少女そのものだった。さながら、森の中に立つ女神でも意識しているのか、ステンドグラスから射し込む光が木漏れ日みたいに像に色をつけていた。

「」

また、微かなあの声が耳に響く。どこから声が出ているのか解らないそれは、確かに

「　よく、いらしてくださいました」

その言葉を復唱する前に、目の前の石像から声が響いた。

「　ええっ、石像が……っ！」

「……あんたか？さっきからの声は」

ビビりまくる小唄を後目に、俺は目の前の石像に向かって一歩足を踏み出した。背中に小唄が張り付いてくるのが邪魔だ。

「　ええ、わたくしです。今まで何度も何度も、異界のものに呼びかけました。けれど、ここまで来て下さったのはあなた方だけでした……」

寂しそうな声音に、俺はこの声の主が一体何人の人間を呼び続けたのかが気になった。そして、そのあと彼女の言う「異界」という

言葉が耳につく。

質問をしようと身を乗り出すと、急に目の前の石像が光り出す。背後から情けない悲鳴が聞こえた。小唄だ。

光はそのまま石像に重なるように広がり、まるで服を着るように色をつけていく。たとえるなら、壁に映された映像を立体的にしたような感じだった。

「驚かせてごめんなさい、……あの、大丈夫……ですか？」

まだあどけない少女が、困った様子で俺　　というか背後の小唄に訊ねた。当の小唄は、ぷるぷる震えながら背中に張り付いている。

「こいつは無視して良い。どうせ聞いてはいるから」

「……」

何か言いたげな少女の視線は、あえて無視する。今は小唄よりも目の前のこいつに質問しなければならぬ。ここはどこなんだとか俺たちはどうなってるんだとか、アンタは誰だとか。

「……わたくしは、この世界　　セイムルダの世界樹です。貴方の聞きたいことも含めて、今の状況をお話します」

少女はそう言って、先程までとは違う真剣な表情で語り出した。

### 異世界セイムルダ

俺たちの目の前に現れた少女は、その世界の中心である世界樹の聖霊、つまりはセイムルダそのものだと名乗った。

彼女が言うには、セイムルダの世界樹は現在かなりのスピードで衰えていて、その要因のひとつに「クナ霊力を食らう石」があると明かした。

藍色に輝くというその石は、無差別に転移を繰り返して霊力を食らい、増殖するらしい。

その石をどうにかして破壊し尽くすため、セイムルダは異界から力ある人間を呼び寄せ、この祭壇まで導こうとしたらしい。その結果、ようやく釣れたのは平凡な高校生の俺たちで。

「ご迷惑は承知の上でした。ですが、どうしても異界の方に力を借りなければならなかったんです」

申し訳なさそうに呟くセイムルダに、俺はどう返すべきか悩んだ。が、確認しなければならぬことは解っていた。

「……正直、あんたが本当にそのセイムルダって奴なのかも怪しいと、俺は思ってる。……それから、俺はまだ重要なことを聞いてない」

目の前の石像を見上げながら呟けば、セイムルダはなんでしょうかと、気持ち首を傾げるような声音で返事をした。

「俺達は元の世界に戻るのか？ここに来る直前の時間に戻ることは？」

「……」

セイムルダは少し沈黙する。何となく嫌な予感がよぎる。

「単純な話になりますが、このまま、あなた方を元の世界に戻すのは簡単です。ですが、時間を細かく決めてお返しするとなりますと、わたくしの今の霊力ではとても……」

ひどく申し訳なさそうに、彼女は俯いた（ように見えた）。確かにテレビドラマとかで見るタイムスリップもの話なんかも、大抵特殊な技術や燃料みたいに俺達一般人には手のでない技術で実現していたりする。あれはちゃんと真理を突いていたに違いない。

「なら、あんたのその霊力ってやつが何とかならないと、あの時間には戻れないのか」

「そうなってしまう……本当に申し訳ありません」

うーん、戻るには戻れるとは言え、なかなか困ったことになった。

前にも言ったが俺はこれでも無遅刻無欠席、授業中は超優良生徒……のつもりだ。

というのも、俺が通っている高校では、それなりの成績で皆勤を貫けば次の年の学費が半分以上免除される。担任の話では、俺はそこそこ基準は満たしてるって話だ。



無理して俺を高校まで進ませてくれた姉貴のために、俺は意地でも皆勤を貫かなきゃならない。やることなすことめちゃうちな姉貴だけど、俺は今まで姉貴を恨んだことはない。それどころか、親なしでマトモに育ててくれたことに感謝しているんだ。

だから、せめてもの恩返しのためにもこうして皆勤を貫いている。そのためには、ここに来る前のあの時間に戻らないと、困るんだ。

そこまで考えて、俺はセイルルダを見上げる。石像に投影された少女は、じつとこちらを見つめていた。

「……その、霊力をどうにかする石を破壊すりゃいいの？」

「や、倭？もしかして、やるつもりなのか……？」

俺のセリフに、今まで黙っていた小唄が慌てた様子で口を開いた。こういう時だけしっかりしてやがる。

「こんな事で皆勤おじゃんにするのは、悔しいからな。 ちゃん  
と戻れるならどっちも同じだろ？」

さすがに、俺が皆勤を貫く理由を知らないはずがない小唄には、反論は全くできなかつたらしい。とはいえ、こいつを俺の我が儘につきあわせるつもりはなかつた。

「なあ、こいつはすぐに返してやってくれるか？あの時間に戻りたいのは、俺だけなんだ」

「……。それなら、貴方の言うとおりに致しましょう。いつでも、お返しします」

俺とセイルルダの会話に、小唄は「え!？」とか「ちょッ」とか言つて、慌てだす。まあ、一人で帰れなんて言えばこいつのこと、不安にもなるんだろうな。

「少なくとも俺は、皆勤の保証が立たない限り帰れないから」  
改めて考えれば、なかなかあり得ない理由かもしれない。が、俺にとっては生活と恩返しを兼ねた死活問題なんだ。

「……倭、俺……」

「……悪いな、我が儘言つてさ。たぶん戻ってくるから、先行つてくれよ」

できるだけ、笑顔を作ったつもりだった。が、正直ほんとは心細い。元の世界でならきつとこんな事はないんだろうが、ここはまだどんな場所かも解らない未開の地。仕方ないとは言え、唯一の親友さえいないのは心細かった。

「……それでは、彼をお返しします」

少し申し訳なさそうなセイムルーダの声が背後から聞こえる。その瞬間、小唄の体が光り始めた。

ああ、これでしばらく顔すらみれないか。手を振ろうとすると、小唄は軽く目を見開いた。

「 待って！」

切羽詰まった声が、耳に響いた。

### #003：旅立ち

「待つて 俺も残る」

震えながら、いつもよりも頼りない声で小唄こづたが言う。やせ我慢だな、とはわかっていた。

「……無理すんなよ、お前極度のビビリだろ？」

セイムルードが気を効かせているのか、さっきまで小唄を覆っていた光は消えていた。ちゃんと話し合えって事か。

「……確かに俺は、お前みたいに度胸もないし、いつもビビってばっかだけださ」

まだ震えながら、小唄は俺をしっかりと見つめる。そして、制服の袖を掴まれた。

見なければ良かったのかも知れないが、灰色の目はすごく真剣に俺を見る。そこで俺はしまったなと独りごちた。

小唄がこんな目を見ると、どうあっても引かない。結局、俺の我が儘にこいつを付き合わせなければならなくなる。今回ばかりは、素直に先に帰って欲しかったんだけど。

「いまここで帰ったら、絶対後悔するじゃん。俺、お前ほど度胸ないしビビリだけど、後悔するのは絶対嫌だ」

困った、本気で困った。こんな事を言い出されたらますます帰しにくいじゃないか。実は狙ってるだろこいつ。

「……こいつが帰れて言っても、俺は絶対帰らないからな。そこんどこ、よろしく頼むぜ」

なんて言おうか悩んでいると、小唄は沈黙していたセイムルードに向かっつとんでもない宣言をしゃがる。先手必勝ってわけか、相変わらずの頭の切れ方だ。

「……そうまで言われますと、わたくしだけの判断ではお返しできませんね」

そら来た。彼女がそう言うのを解つて、小唄はああ言ったんだ。セイルルダとしては協力者が増えるほうが嬉しいはずだし、何よりああ言われて本人の意思を無視する奴は、なかなかいない。

「じゃあ、決まりだ。俺も倭やまとと一緒に理科室に帰る！」

「帰るのが理科室ってなんかやな感じだな」

結局、俺は諦めてセイルルダのほうを振り返る。彼女はというと、苦笑しながらそつと目を伏せていた。

「お二人とも、わたくしの霊力が必要分まで戻ったらお返しします。

……それまでで構わないので、協力していただけますか？」

「というか、協力するしかないんだろ？」

あくまで腰の低いセイルルダに、俺は肩をすくめた。そうですねと呟いた彼女。正確には石像の胸元から、装飾として埋め込まれていた宝石がひとりでに外れて浮き上がる。色からして、琥珀だろうか。

それは水みたいに二つに分かれ、それぞれが俺と小唄の目の前にやってくる。くると宝石の周囲に光が渦巻いて、やがて俺の目の前の宝石は小さなペンダントになった。

「すっげー」

小唄が感嘆の声を上げる。ペンダントを手にしてみれば、それは確かに質感があつて、チェーンの部分もしっかりと金属でできていた。

「その石にそれぞれ、わたくしの力を宿しました。遠くにいても、わたくしの力を使つたり、会話することができますわ」

「連絡手段つて奴か。まあ、確かに俺たちはこの世界の事を知らなすぎるしな」

セイルルダにしか出来ないこともこの先山ほどあるんだろう。ゲームで言うならイベントアイテムみたいなもんだな。とか思っていると、背後で小唄がごそごそしている。

「ねーねー倭、これ似合う？」

遠足的なノリでニコニコ笑いながら俺の前に回り込む小唄に、呆

れないはずはない。が、仕方なく小唄を見上げると、両耳に琥珀のピアス。

「お前のはピアスなのか？」

「うん。倭のはペンダントなんだな」

互いにもらったアイテムが違う事に、二人で首を傾げる。何か意味でもあるのだろうか？

「お二人の印象で形状を決めたので、大した意味はありません。…

…若干、効果が異なりますけれど」

効果？

何のことだろうと考えていけば、セイムルーダは一息おいて説明を始める。

「倭さんは、力に関する能力が高いようだったので、力を増幅するペンダントを。対して、小唄さんは知力に秀でているようなので、霊力を増幅する耳飾りを授けました」

にこやかに解説するのはいいが、それってつまりは「戦うかもしんねえ、ってことか？」

全く知らない世界で、知らない奴をぶん殴れと言うんだろうか。

俺達の目的は、石とやらをぶっ壊すだけじゃあなかったか。

「外の世界には、霊力を喰らわれ暴走した獣や、魔獣が闊歩しています。さすがに何も備えがないのは無謀というものですわ」

……盲点だ。確かに、霊力だの聖霊だの言うような世界に、いわゆるモンスターとかが居ないはずは確かにない。だから困ってるんだろうし、適当に旅して石破壊してりゃいいなんてこたあないわな俺が甘かった、サーセン。

「ねえねえルーダさん、霊力を増幅ってことは、俺は魔法みたいなもん使えるって事？」

「その素質は確実にあります。…：…そうですね、試しに何も無い場所に向けて手をかざしてみてください」

俺が悩んでる間に、なぜか小唄はセイムルーダと仲良くやっっている。と、その小唄の手から小さな火球が飛び出した。

「……小唄、今のなんだ？」

火球は途中で情けなくかき消えたが、明らかにそれはライターどころの炎ではない。それに、小唄の手から飛び出してきた

「それは初級の魔法、ファイアボールです。危ないので森や屋内で連発したらいけませんよ」

今それを小唄にやらせたのは誰だよ。そんなことを思ったが、口に出す前に小唄の悲鳴みたいな声が耳を貫いた。

「すっげー！魔法だよ魔法！なあなあ見たか？俺魔法使いだぜ！」

キャツキヤキャツキヤしながら飛び跳ねて喜ぶ小唄に、もはや俺はなんにも言えない。さっきまでのあのビビりようはなんだったんだか……

「今のは、<sup>スベル</sup>言霊を使用しなかったために威力のないものでしたが、発動にあわせて言霊を発すればより強力なものになります」

「マジか、なんか本格的だな」

ウキウキしながら説明を聞く小唄に、俺は呆れるしかなかった。

制服の上に、神殿の奥で見つけた古びたマントを羽織る。正直滑稽な姿な気がするが、制服のまんま人里にでるのはマズいというセイムルーダの意見を採用した。金が手に入ったら、真っ先に服を買わなきゃならないみたいだ。

とはいえ、こっそりとセイムルーダが教えてくれた小さな部屋から、いくつかの宝石やら調度品が見つかった。まずはそれを売って事らしい。

「しかし、いいのかよ？なんかどれも大事そうな代物だけど」

『もとは人間の方々が奉納していたものですわ。わたくしには価値のないものです』

ペンダント越しにセイムルーダの話を聞きながら、ザックに詰めた宝石類を見る。古びたポロポロのザックも、マントと一緒に見つ

かったものだ。

『昔は、他の部屋にもかなりの量がありましたわ。今は盗掘などで殆どを持ち去られて、この部屋しか残っていません』

「うーん、なんかそう言われると、俺達も盗賊みたいだよな」

尤もなことを小唄が言う。確かに、資金源にしたいとはいえ俺達も似たようなもんだ。

「フーか、服は良いとして、せめて外を歩く間だけでも武器が欲しいな」

『祭事用ですが、そこにありますわよ』

ダメ元で呟いたはずの俺の要望に、セイムルーダはペンダントを浮かせて部屋の隅のロッカーのような棚を示した。開けてみれば確かに、剣みたいなもの置いてあった。

「いくつかあるな……なんだ？これ」

手前の剣に引つ掛けられた腕輪のようなものを取ると、ザックに何かを詰めていた小唄が近寄ってきた。

『術師の方が杖の代わりに使う腕輪ですわ。これは小唄さん向きですわね』

「ラッキー！杖ぶん回すのもアリだけど、動きやすいほうがいいよな」

解説を聞くやいなや、小唄は俺から腕輪を受け取って腕にはめる。正直、制服にその金ぴかの腕輪は似合わなすぎる。

といっても、俺のほうも剣くらいしか選択はない。仕方なく、ゴテゴテ装飾がついた剣の中から比較的シンプルめな銀の剣を選んだ。シンプルといえどこいつもなかなか派手だけどな。

「……そっぴやさ、倭は魔法駄目なのか？」

鞘に付いていたベルトで剣を腰に固定すると、不意に小唄が疑問の声を上げる。確かに、言われてみれば気になる。

『出来ないことはないですが、威力は期待できませんわ。でも、傷を癒すくらいは出来るはずです』

どうやら、俺には素質がないらしい。正直予想はしていたが、そ

れでもちよつとは使えるというのは驚きだ。

「まあ期待はしてなかったけどな……。んで、持って行くのはこのくらいで構わねーか」

さすがに、ザックに詰め込んだ宝石やら装飾品はなかなか重い。この世界でこういう宝飾品がどれだけの相場か解らないだけに、とりあえずは持てるだけを詰め込んだ。

俺の様子を見て、小唄もザックを背負う。なんとか、準備は出来たみたいだった。

外に出ると、もう空は茜色に染まっていた。夕方が　そう思いながら腕時計を見ると、学校なんかとつくに終わってる時間。今頃担任やらクラスメートが（主に小唄を）心配しているかと思うと、なんだか申し訳なくなる。

そんな事今考えたって仕方ない。俺の、いや、俺と小唄の目的は、霊力喰らいの石を探すことだ。確か別名は、クイオスストーン混沌石だったような。

まだそいつがどんなもんかも解らないし、実は壊し方も知らない。その辺はまさか無計画なんて事はないだろうし、俺達にでも破壊できる代物なんだろう、たぶん。……正直なんか心配すぎて聞くに聞けないんだがな。

んなことを考えていれば、俺と小唄の目の前に黒い塊が踊り出した。俺達よりもかなり背の低いそれは、ひと目で獣のようなもんだと理解できた。が

「なん、だ？これ……」

小唄が隣で何とも言えない感想を呟く。そりゃそうだ、煙みたいな　だが煙よりどす黒い何かが体中から噴き出して、そいつを覆っている。たとえるならどす黒いオーラだ。

『あれは、最近数を増やしたシャドウウルフです。正直、剣では厳しい相手ですわ』

ペンダントから声が聞こえる。親切に攻略法まで教えてくれたの



はいいが、いきなり俺はいらな子扱いか。

「つまり俺は時間稼ぎしろってさ」

肩をすくめて呟けば、小唄はなんか真っ青になっている。やっぱりこいつアテになんねえ……

「……剣で倒す方法はないのか？」

『そ、そうですわね……』

俺の質問に、セイムルーダが困った様子で何か考え出す。が、その前に真っ黒い塊が飛びかかってきた。

「うおわ!？」

慌てて剣を抜いて、口のような部分を刀身で受け止める。チラツと背後を見ると、小唄がおろおろしている。結局俺しか戦えなさそうだ。

「ちっ」

舌打ちをして、俺は剣に噛みついた黒い狼を振り払おうと剣を振り回す。剣は鋭しいってのは確からしい、見ていると剣に噛みついた状態はかなり痛そうなんだが、振り回してもビクともしない。

『言霊を 剣に自分の霊力を集中してください』

ペンダントからセイムルーダが囁くが、つまりそれは何をすりゃいいんだ。よくこの手の魔法とかは精神集中がどうの、て言われているが。

『霊力の込められた一撃なら剣でも痛みを与えられ……』

「わかったけど、言霊って何を言うんだよ!？」

魔法の原理に関しては小唄しか聞いてない。そもそも、使うことがないと思ってたんだから

「 な、なんでもいいんだ、かけ声でも、適当な単語でもっ」

まだ青い顔で小唄が叫ぶ。まあ奴にしては堪えてるほうだ。尤も、今魔法なんかぶっ放されたら俺が巻き添えを食うんだが。

「 とりあえず邪魔なんだよ、てめーは!」

しつこいくらい剣に噛みついたままスポンみみたいに離れない(寧ろ振り回されて離せないのかもしれない)化け物に、俺は剣に集

中して叫ぶ。と

ふわ、という音が正しいかも知れない。

急に剣にかけられた重みが消え、俺の横をふたつの何かが飛んでいった。

背後の小唄が悲鳴を上げ、次いでどさりと何かが落ちる。振り向けば、真っ黒い獣が真っ二つになって、腰を抜かした小唄の前に落ちていた。

「……今ので良かったのか」

「……ええ。……大丈夫ですか？」

セイルルダが何を心配しているかは、すぐに理解した。が、俺にはそれに答える余裕は全くなかった。

## #004：迷いと友情

街に着いて、手持ちの宝石を店で売り、そのまま宿屋へ。

世界樹の麓の街だというその街は、ところどころに古びた木の根っこが飛び出している。足を引っかけたりしたが、何もそれは余所者だけではなく住人もよく転ぶらしい。

かといってその根を切るのは、世界樹の寿命を縮めることになるらしい。確かにそれは困るなと思いつつながら、俺は世界樹の根が飛びだしている部屋を見た。

「宿屋にまでルーダが居るみたいな気分」

小唄の意見には賛成だった。世界とは縁がない俺達が、セイムルーダ本人とは面識を持っている。部屋の中に飛びだしたこの根も、彼女だということには驚くしかない。

だが

「根っこ以外の部分はどうしたんだ？」

素直な疑問が口をついて出る。小唄もそこは気になっただけらしい。というのも、この周辺には木に見える場所がない。

「あら、さっきまで貴方達が歩いていましたわよ」

……………。

とんでもない発言を聞いた気がする。さっきまで俺たちは、神殿のあつた山を下っていたんじゃないのか？

「わたくしももうかなりの年月、成長を続けております。長い間に隙間に土砂が積もって、一見山や森みたいには見えませんが、横を見れば小唄があんぐりとしていた。それって一体どれだけ掛かったら実現可能なんだろう。一万年じゃ済むわけがない。」

「すごい長生きなんだな……………」

当たり前だが、そう言いたいのは理解できる。楽しそうに世界樹の根っこを触ったり、部屋の中を見て回る小唄を後目に横になる。

正直な話、あの一件で少し気分が悪い。

『……自分の手で命を消滅させることを、喜ぶ方は居ませんわ』  
セイルムルダの言葉に、はしゃいでいた小唄が静かになる。ベッドに揺れが生じて、小唄が乗ってきたんだなと理解した。

「……ごめんな、倭。俺、結局役に立たなかつたし、お前一人に押しつけちまつたよな」

案の定どころか、何で一字一句間違わないレベルで予想通りのことを言うんだよ。いい加減小唄の考えていることを予想しすぎだ。小唄自体が予想されやすすぎるのかも知れないが。

「……お前は悪くないよ。俺が気にしすぎてるだけだ」

溜息を吐いて起き上がれば、小唄は少し寂しそうに俯く。勝手に自己嫌悪されたって困るんだが。

「……倭さあ、いつもいつも俺に気を使っただけだよな。……そりゃ、気を使わせてる俺が一番悪いとは思っけど」

困った様子で頭を掻く小唄を、俺はじっと見た。腐ってもなくても経営者、小唄は自己分析力には長けている。

「……でも、俺だってたまには頼りになるんだぞ。……悩み聞いたりくらいだけど。そんなんでも、ちよつとは気持ち、ラクになるんだぜ」

気がつけば、小唄は俺にかなり近寄って、すぐ側に顔がある。あんまり近すぎるその距離に、俺は今更驚いた。

というか、鼻がぶつかりそうだ。気分はヤクザにガンつけられた一般人。……語弊があるかもしれんが。

「……正直アレが人間だったら、もっと気にしてたな」

密着寸前の状態に耐えかね、俺は俯いて溜息を吐く。なぜか、小唄に頭を撫でられた。

「な、何で撫でるんだよ」

「いやあ……年上としてはこう、いいこいこってやんなきゃかなって」

たまにこいつは理解しがたいことをぼろりとこぼす。今回も例に

よってそれらしく、ニコニコしながら俺の頭を撫でていた。

「倭は全部自分の中で解決しようとしすぎなんだよ。だからって俺に何が出来るかも解らないけど、もしかしたら話せばラクになったり、もっと簡単に解決したりもするんじゃないか？」

「……」

多分、小唄の言うことは間違っていない。俺は確かに、他人に迷惑をかけるのが大嫌いで、できるだけ自分で解決しようとしていた。もちろん毎回上手く行くはずはなくて、たまには落ち込んだりする。

小唄は、それを心配してくれてるんだろうか。

「たぶん俺だって、いきなりあんな風に生き物を殺したりすりゃ、怖くて震えるよ。でも、あれを倭が倒してくれなかつたら、すごい怪我してただらうし、ひよっとしたら俺達二人とも死んでたかも知れない」

小唄はすこし言葉を探しながら、俺の目を見る。やはり距離はかなり近いが、無駄に顔がいいせいかわらしたくはならない。

「……正直怪我が無くて安心したし、それに、あんな風にちゃんと戦える倭はすごいなって思った。……俺なんか腰抜かしちゃったしな、すんげー情けないぜ」

はぁ、と溜息を吐いた小唄に、俺はなんとなくこいつがさっき俺を撫でた理由が解った気がする。真似るように頭を撫でてやると、へへ、と笑って顔を上げた。

「次は絶対腰抜かしたりしないからな」

「……どーだかな、足すくませんなよ」

精一杯の小唄の虚勢に、憎まれ口を叩く。なんとなく頭を痛めていたあのもやついた感情は、今はない。

『お二人は、仲が良いですわね』

沈黙を守っていたセイムルダが、くすくす笑いながら囁く。そんなことあるよねー、なんて言いながら小唄が笑い出すと、俺も自然と笑っていた。

「混沌石？あんなもん探してどうするんだ」  
ケイオーストーン

酒場のマスターらしき禿親父が、俺を睨んで（たぶん、そのつもりはないのだろう）質問する。どう答えようか迷っていると、小唄が一步前に出た。

「さる高名な方が私たちに、世界樹の霊力がこれ以上浪費されないよう石を破壊せよと命じたのです。これ以上の説明は容赦していただきたい」

なんとという口から出任せだろうか。だがこの世界にも王族やら貴族はいるはずで、名前さえ伏せればなんとも言いようがある。

「こりゃ驚いた、まさかあんたら、レダノの特務か？動き出したとは聞いたがこんなところまでなあ」

「ご理解頂けたなら話が早い。何か情報はないだろうか」

勝手に勘違いするマスターに、小唄はいけしゃあしゃあと交渉をはじめた。その手から金貨が手渡されたことには、本人達以外には俺しか気付かない。

……もしかしたらこいつ、この世界に向いてるんじゃないだろうか。あまりの手際の良さに、セイルルータすら呆気にとられている。

「倭、いくつかそれなりな話が聞けたぜ」

話を聞いているあいだ待っていた俺に、ニコニコしながら小唄が近寄ってきた。向かいに座って、ウェイトレスに適当に注文をつけると、制服からメモを出す。普段は奴の会社のスケジュールやらが書かれているメモは、普段以上にまったくよくわからない単語に溢れていた。

「地名とかはわからないからとりあえずメモだけはしたけど、あとで地図買ったほうがいいかもな」

運ばれてきた飲み物と料理を前に、小唄は細い目をさらに細くして呟く。そこでようやく、セイルルータが口を開く。

『小唄さんは、交渉術に長けているんですね。驚きましたわ』

そりゃあ若干18歳であれだけのはつたりをかましてくれたら、

いくらなんでも誰だつて驚く。こつというのが得意とは聞いていたけど、実際見るのは初めてだ。

「ダテに投資家やってないよ、必要な情報もできるだけ値切るからな。とはいってもまだこの世界の金の基準が解らないけど」

「はあ……。お前ほんとに高校生かよ？」

サラダをつつきながら、小唄ならすぐにその基準つてやつを体得しそつだと思つた。なんせ15の時に一年留年までして世界一周ホームステイなんてことをやり遂げたやつだ、外国にでもいるつもりなんだろう。

「そついや、なんで言葉が通じるんだ？」

ふと、俺は今まで何故か気付かなかつたことに疑問を抱き、首を傾げる。ここが外国なら普通言葉なんか通じないはずだ。

「あ、俺さつきそれが気になって、マスターに英語で話してみたら通じたぜ」

「……まじで？」

セイルルダではなく先に発せられた小唄のセリフに、俺は冷や汗を垂らす。もしかしてこの世界の住人はみんな2カ国語ペラペラなんじゃなかるうか。そんなまさか。

『小唄さんがいきなり違つ言葉で話されたことには驚きましたわ。』

でも、意味さえあれば伝わるようになっていきますの』

「へえ……。便利だな。もしかしてこの世界の他の地域で言葉が違つても、俺達には解るのか？」

俺が興味本意で聞くと、セイルルダはそつですわと答える。加えて、これは召喚術にそついう要素が含まれているからとも教えてくれた。

「通訳の仕事とかやつたら儲かるんじゃないか？」

「冗談混じりに小唄が言つ。確かにそれはラクそつな話だ。が、俺達が金を稼ぐ理由は今のところない。」

「ま、今は混沌石をぶつ壊しに行くのが先だよな。聞いた場所はどこもばらけてるから、馬車で移動したほうが良いみたいだぜ」

「あんのか、そんなもん」

すっかり情報役になつてゐる小唄は、得意げに乗り合い馬車があると云つた。それもさりげなく聞いたんだらうなと思う。

「けど、まずは服をどうにかしないと。制服はともかく、マントはもうかなりぼろいし」

確かに、神殿にあつたマントはかなりの年月放置されていたのか、あちこちが痛んでいる。着れないわけではないものの、破こうとすればすぐに破ける。

「まずは身の回りのもん揃えて、地図……かな。商店の場所も聞いたからなんとかなるだろ」

いつの間にか互いに食事は済んでいた。勘定を済ませて外に出ると、まだ日が昇りきるくらいの時間だった。

がたがたがたがた。

ごとごとごとごと。

無機質な音を立てて走る馬車の中、俺はげんなりして頭を抱えた。粗末な木造の椅子が、これまた木造の車輪の荒い動きと同時にガタガタ揺れる。馬車を舐めていた俺が悪いんだらうが、正直とても座つていられない。

「クツションでも、用意、すればよかつた、な」

途切れ途切れに小唄が呟く。あんまり歯切れも良くないのは、舌をかまなないようにしているせいかな。

『大変そうですわね……』

半ば他人事にセイルルダが呟く。遠くにゐる奴は良いよな……当たり前だが揺れの影響がないらしいセイルルダに、この苦痛は解らないだらう。仕方ないとは思つが、それにしたつてもう少しどうにかならぬもんか。

思つてゐると、急に馬車が停止する。そして、御者の悲鳴

「……おい」



急停止はともかく、悲鳴は普通じゃない。慌てて窓から外を見れば、前方に黒い影が複数あった。

「大丈夫か?!」

御者に声をかけると、何とも言えない悲鳴と一緒に「助けてくれ」という叫び声。生きてはいるが、逃げ出すことも出来ないのだろう。

「小唄、腰抜かすなよ?」

「わ、解ってるよ……:というか、どうすんだ?戦うにしても、あいつら群れみたいだぞ」

確かに、窓から見るに正面切って戦うのは不利だと俺でもわかる。となれば、頭を使うしかない。

「俺が先に出て、あいつらに追いかけて回される。その間にこの上に登って、魔法で狙ってくれ」

ものすごく気が進まないが、これくらいしか方法はない。小唄の返事を聞かずに馬車から飛び出すと、御者のにじり寄っていた化け物達は俺を見る。念の為剣を抜いて化け物の群れに突っ込んでいくと、そういう習性なのか飛び上がって飛びかかる。難なくそれをしやがんで避ければ、目標を見失ったらしいそいつらが背後に着地した。

思ったより数は少ない。5匹ほどのそれは、まあ見事に白と黒。

黒い奴は昨日お目にかかった狼と思うが、白いはなんだか山羊みたいな体型をしていた。

「あの白いのも魔法じゃなきゃきついか」

外見的に、そんな事を思う。狼と同じく「白いオーラ」みたいなもんを纏っていたから、なんて理由だが。

「よし、鬼ごっこだ。100M12秒いらぬ俺を舐めんなよ」

挑発というのをどうやるかわからないが、それっぽい口笛を吹いてみた。が、どうやらノってくれたらしく、化け物どもが一斉に飛びかか……

「うわっ、早っ!?!」

すぐに眼前に迫られ、俺は横に飛び跳ねる。反復横跳びをはじめ

て生かした気がする、とかはどうでもいい。

飛び退いて走つてを繰り返しながら、俺は出来るだけ馬車と距離が離れないように化け物を一カ所にまとめる。簡単に言ってるが、並々ならぬ努力のもと……というわけではないか。

「ふ……ファイアボール！」

俺が必死に走っていると、突然ぎこちな言霊が響いた。

## #005：亜麻色の髪の乙女

小唄こづたとしてはタイミングを見計らったつもりなんだろう、唐突な火の玉をギリギリ避ける。狙いは確かだったようで、ちょうど化け物たちが集まっていた場所に命中した。

「ギャウヴン！」

なんとも気持ちの悪い悲鳴を上げて、化け物たちが身体についた火を消そうと身体を転がす。その中の一匹　白いオーラの山羊が、俺に突進してきた。

「……っ!？」

思ったよりそれは早く、反撃が間に合うかすらわからない。剣で山羊の頭を止めようと構えるが、簡単に剣ごと弾き飛ばされた。

地面に尻餅をついた瞬間、獣の荒い鼻息が耳をかすめる。小唄が何か叫んでいるが、たぶん魔法は間に合わない。もう仕舞いか

あっけなかつたな、なんて思いながらぎゅっと目を閉じる。悲鳴のような雄叫びが上がり、そして

「……？」

なんの衝撃もないことに不思議に思った。と、目の前がやや暗くなる。見上げれば、それが人間であることが解った。

「大丈夫かしら」

亜麻色って言うんだか、うすい茶色の髪をした、たぶん俺よりは年上の女の人。

彼女の背後には、もう動かない山羊の化け物が倒れている。あの一瞬で、彼女は一体どこから現れたんだ？　そんな疑問より先に、差し出された手を掴んでいた。

「　あの、ありがとうございます」

馬が一匹減ってしまったせいか、先程よりは揺れが酷くなくなった馬車で礼を言う。大人っぽい雰囲気的美女に値する、と思う

彼女は、シエラと名乗った。

「礼には及ばないわ。馬車が見つかって、おまけにタダでいいなんて御の字だもの」

言っていることとは裏腹に、彼女は品の良い笑顔を見せる。モノの価値なんか解らない俺でも解るほど良い服を着ている彼女が、金に困ることはあまりなさそうに見える。

「ところであなたたち、どこに向かうのかしら？」

おそらくは意味のない、ただの話題作りなんだろう。が、俺は行き先を小唄に任せっきりでよく記憶してなかった。

「この先にあるミルダ溪谷に向かうつもりなんだけど」

タイミングよく小唄が口を開く。あら、と驚いた様子でシエラが口元に手を当てた。

「偶然ね。私もそこへ行くのよ」

にこりと微笑むシエラの、天使みたいな笑顔に気を悪くしない奴は居ないんじゃないか。少し見とれていると、肩を叩かれる。

振り向くと、頬に小唄の人差し指が突き刺さった。

「んなつ!？」

「なーにデレデレしてんだよ、お前」

ケラケラ笑いながら俺を小突く小唄に、からかわれたとようやく気付く。

そりゃあイケメン様は美女なんか見慣れてるんだろ。ホームステイ先は美人ばつかだったなんて話も聞いた。そう考えればシエラすら小唄的には平凡なんだろうか。

「仲が良いのね。ところで二人とも、同じ服を着てるみたいだけれど……どこかに所属しているのかしら？」

俺と小唄の掛け合い漫才を見ながら、シエラがふと訊ねてくる。

確かに、制服つてもんはどの世界でも組織的に見えるらしい。

「ああ、これは学校の制服ですよ。俺たち今、<sup>マナ</sup>霊力について研究し

てるんです」

出た、小唄の口から出任せ攻撃。よくもまあ平気で嘘が吐けるもんだ。

「そうなの？それでミルダ溪谷へ……まさか、混沌石ケイオストーンを探すつもり？」

いきなり確信に迫られて、俺は冷や汗をかく。が、小唄はそんなことないらしい、俺には構わずにそうなんですよ〜なんて。

「危険なものとは解ってるんで、破壊して調べてみよう」と

それとなく、混沌石をどうするかまで言っただけからすごい。小唄の話聞いたシエラは、何かを考えるように腕を軽く組む。「うーん、止めるつもりはないけど、心配ね。知ってるだろうけど、あの石の周りには魔獣が集まりやすいのよ？」

彼女が俺たちを心配するのは、実力の面でも当たり前だ。けど、最後に付け足されたそれは知らないぞ。

『……説明し忘れてましたわ』  
ペンダントではなく、直接頭に声が響く。忘れてたって……。

「ねえ、よかつたら私、一緒に行くわよ。もしかしたら目的のものも見つかるかも知れないから」

目的のもの？

正直にありがたい申し出とその理由に、どちらから先に返事をすべきか迷う。と、小唄が俺の肩に手を置いた。

「それはかなり、ありがたい。けど、目的のものとは？」

あつさりと二つの返事を返す小唄に、シエラはにこりと笑って一枚の紙を出した。

「……花？」

手のひらから少しはみ出る程度の紙には、可憐という文字にぴったりの花が描かれていた。星形の花弁は、俺たちの世界にも似たものがあるが、それとはまた色や造形が違う。

『ミルダ溪谷のフェリシア、と書かれていますわ』

またセイルーダの声が頭に響く。下に書いてある文字を読んで

くれたのだろう。

「その花はね、病気の治療薬なのよ。花卉にたまった小さな蜜に、霊力が溢れるほど含まれているらしいの」

「病気の家族でもいるのか？」

聞いたあとしまったと思うが、シエラはいいえと首を振る。

「世界樹の麓で受けた依頼よ。普段は世界樹から出る樹液で賄えるけれど、混沌石のせいであまり世界樹の霊力を消費できないみたいで」

これはセイルルダには耳に痛い話かもしれない。シエラの説明に納得したのか、小唄はなるほど頷いた。

「なあ、小唄。フェリシア、って花もようは霊力の塊なんだから、混沌石を先に破壊しておかないと面倒なことになるんじゃないかな」  
さすがに俺だってなんの予測も出来ないはずはない。混沌石の特性を考えれば、フェリシアの花の霊力も奪われてしまうんだろうと思う。だからシエラは俺たちに協力を申し出たんだろう。

「どっちにしろ、花も一人で探すより俺達が出たほうが早く見つかるはずだよな。さっきで俺達の実力のなさを思い知ったし、シエラさんがいたほうがいいよ」

「そうだな……」

俺の提案に小唄はゆっくり頷いた。

なんとなく、ほんの少しだけ残念そうに見えるのは気のせいかな。

「決まりね。それじゃあ、よろしくお願いするわ」

そんな感じで、俺達とシエラのにわかパーティーが組まれたのだ。  
った。

ミルダ溪谷の手前にある小さな街は、混沌石の影響が荒れ果てていた。土はからからに干からびて、干上がったのか川らしき場所も水が流れていない。

「すごいわね、街が死人みたい」

シエラが神妙な顔つきで呟く。街は静かで、住人達もあまり活動的ではないらしい。それにしても街が死人だなんて、不思議な表現だ。

「……まあ、この荒れようじゃそう言っても不思議じゃないよな」  
その感性には通じるところがあるのか、小唄は足元で枯れた雑草を手にすくい上げる。

「根こそぎって感じだな……住人、大丈夫なのか？」

「かなりダメージが大きいみたいね。水や食事は期待できないわ」  
水がなければ、人間は生きれない。俺たちの世界でもそれは当たり前だけど、この世界にとっての水は霊力を運ぶ媒体でもあるとセイルルードが言った。

「宿……くらいはあるよな。少なくとも寝る場所くらいは確保したい」

小唄が宿を提案するも、シエラはふるふると首を振る。

「同感だけど……たぶん無理よ。みんなマナを吸われてるくに働けないし、他人に構ってられる余裕はないわ」

街の人間達は何故逃げないのか　一瞬そう思うが、逃げられるはずはない。

だがいよいよもって、このまま野宿フラグが濃厚だ。小唄じゃないが、正直この場所で野宿はかなり衛生面が心配になる。

「溪谷に入って、すぐにも混沌石を探すべきね。……住人がすぐに回復するとは思えないけど」

結局、シエラの提案に従うことにする。とはいえ、これは野宿確定なんだろうな……。

所々まだ草木や水が残っているようで、溪谷の中は街よりはマシに見えた。

正直、霊力を溜め込んでいるフェリシアの花もヤバいんじゃないか。そんな事を考えていたんだが、もしかしたら生きているものが

あるかも知れない。

「あつち側にはまだ水や緑がたくさんあるわ。……となると、混沌石はこつちよね」

途中から二つに別れた進路を示して、シエラ。左側には確かに、生い茂るとまではいかないが青々とした草木が見られる。対して右は、一面茶色の、枯れ木と岩だらけの世界。

同じ場所でも影響が別れるのは、セイムルーダの言っていた靈力の流れによるのだろうか。完全に色違いだ、なんて小唄が呟いた。

「とりあえず、右に行ってみよう。……の前に、いろいろお待ちかねみたいけど」

俺がそんな事を言う前に、シエラは気付いていたらしい。短剣を抜いて何かの言霊を発すると、彼女の体が一瞬赤く光る。

途端に、前後左右から目の赤い獣が出てくる。狼にハイエナに猪、さらになぜかシカとかまでいる。たぶん、こいつらが靈力を奪われて暴走した獣なんだろう。

「猪は食料になりそうね。……たぶんあんまり美味しくないだろうけど」

冗談のつもりか、シエラは笑みを浮かべて呟く。背後にいる小唄が、シエラのものをまねたのか頼りない声で言霊を発した。

瞬間、身体が軽くなる。なるほど、これなら素早い動物相手に軽く立ち回れそうだ。

「サンキュー！」

「行くわよ！」

小唄に礼を言って、俺は背後にいたシカと鬼こつこを始めた。

「意外といけるものね、野宿」

暗くなりはじめたころ、途中見つけた洞窟で俺たちは休んでいた。なぜか小唄が持っていたライターで枯れ木に火をつける。



一瞬未成年で喫煙してたのか？と疑ったが、そんな事はないらしく、父親から貰った有名ブランドの特注品らしい。

「便利なものがあるのね。そんな小さなものが火の霊力を操るなんて」

「原理は簡単、だったはず」

ライターをしまいながら、小唄が微笑む。興味はあるがそれほど頓着していないらしく、シエラはザックから非常食を出した。

それを見て、俺達も念の為買っておいた食料を出す。備えあれば憂いなしなんて言うけど、備えが役立つ事なんてこれを含めてほんの少ししかない。

「そういや小唄、なんかずいぶん魔法が様になってきたな」

「あー……うん。だいぶ、集中の仕方が安定してきたよ。それに、倭やまととシエラがいるから」

ニコニコしながら干し肉をかじる小唄に、相変わらずだなあと感じる。小唄はとにかく、小さい頃から物覚えが早い。無理だって言われたり思われていたことを平気でこなしてしまうし、ぼーっとしているときにもちゃんと人の話は聞いているのか、よそ見をして授業で指されてもすらすらと答えが出る。頭の構成はたぶん俺と間違いないく違う、天才タイプだ。

「学生にしてはいい戦いつぶりよ。でも不思議ね、言霊を魔法だなんて。……確かに、そんなものだけねど」

どうやらこの世界では、言霊以外の呼び方はメジャーではないらしい。一瞬びくつとするが、魔法という単語自体はおかしくないように安堵した。今度から気をつけなければならぬか。

「あはは、魔法のほうに夢があるっしょ」

相変わらず上手いごまかし方をして、小唄は水筒から水を飲む。しばらく、他愛もない会話が続いた。

## #006：エンカウント

交代で見張りを立て、夜を過ごす。焚き火に、あらかじめ運んでいた枯れ枝をくべながら外を見た。

こんな風に外で夜を過ごすなんて、数日前には思わなかった。見張りとはいえ、何となく一人で起きるのはさみしいものがある。腕時計を見たら、まだ数時間たったばかりだ。

「倭やまと」

シエラが起きないように気を使っているのか、潜めた声が俺を呼んだ。意外に早く起きてきた小唄こつたを見上げると、にこりと笑って横に座る。

「眠かったら寝て良いよ。俺、もう十分寝たから」

枯れ木を火にくべながら、小唄は交代を申し出る。が、何となく俺はまだ寝れそうになかった。

「まだ眠くない。……もうしばらくしてから寝るわ」

苦笑いしながら答えると、そっか、と返された。小唄はもう寝るつもりはないらしい。

「……なあ、倭。シエラのことどう思う?」

「えっ?」

唐突な小唄の言葉に、俺は一瞬間の意図が分からなかった。シエラをどう思っているか、そんなこといきなり聞かれても答えに困る。

「……そうだな……」

俺は少し悩んで、さっきまでのシエラを思い出す。よくよく考えれば、会ってまだほんの少しだけど、ずいぶんと彼女を信用しきっていた。

「優しくて、明るくて、強い人だよな。さっきの戦闘でも、結構フォローしてくれてたし。しかも美人だよなあ」

思っていることを片っ端から言い連ねれば、小唄は「やっぱりそ

うだよなあ」と苦笑する。その表情がやけに寂しそうで、俺は首を傾げた。

もしかして、小唄はシエラに気があるのか？

唐突に、そんな事を思う。言動だけ見たらかなり合点がつく。が、なんだかイメージが違う。小唄が会って一日もしない女の人にそうそう心を動かされるなんて、想像が出来なかった。

けど、ここは異世界だ。もしかしたら小唄にとっっているんな変化があったのかも知れない。真っ向否定も、勝手な確定も今は出来ない。

「……そういや、ずっと気になってたんだけど」

なんとなく、その話を続けたくなくて話を変える。とはいえ、これはかなり重要だ。

「シエラさんみたいな人が居るのに、わざわざ、戦い慣れない俺達が混沌石を破壊するのは何でなんだろう？」

その疑問に、小唄も少なからず同意するところがあるらしい。シエラのように戦い慣れた、この世界の住人達は少なくないはずだ。現にシエラ自身、混沌石を破壊するという俺達についてきている。

『シエラさんでは、混沌石を破壊するのは不可能ですわ』

唐突にペンダントからセイムルダの声が響く。俺達が声を潜めているのを意識してか、彼女の声も小さい。

『混沌石は、この世界の靈力をすべて吸収してしまいます。しかし、あなた方の靈力はこことは異質のもんです』

「つまり、俺達は靈力を吸われる心配はないのか？」

小唄が、たぶん予想を交えながら質問する。セイムルダは小さく『はい』と呟き、不意にペンダントから淡く光を発した。

『とはいえ、シエラさんの戦力は今は貴重です。……すみませんが何か、宝石を出して下さい。彼女用に護符を作りますわ』

以前に言っていたセイムルダの力というのは、こういうものだったらしい。小唄がちょっと待ってる、とザックを取りに行く。ちらっとシエラを見ると、ちゃんと寝ているようだった。

程なくして、小唄が宝石を手にやってきた。目立つのを避けるため、結局売りに出していない宝飾品はまだまだたくさんあった。

『ルビーですわね。なかなか理に叶った選択ですわ』

小唄自身は、シエラのイメージで選んだつもりなのだろう。が、どうやら宝石の種類にもいろいろ奥深いものはあるらしい。

ペンダントから光が溢れ、次いでルビーが輝き出す。強烈にも思える光がなくなった時にはもう、小唄の掌にあったルビーは指輪に形を変えていた。

小作りの造形のそれは、リング部分に質素でも華美でもない装飾がされている。前にも思ったが、金属はどこから出来ているんだろう。

『多少、混沌石の影響を防ぐはずですよ。完全ではありませんから、彼女の霊力は温存すべきです』

「わかった。起きたら渡すよ」

小さく頷いて、小唄は指輪を胸ポケットにしまう。気付けば、焚き火の火は消えかけていた。

空が白み始めた頃、俺達はゆっくり渓谷を歩いていた。

獣や魔獣の数は、かなり多い。こまごまと出てくるだけだからまだいいが、群れで出られたら少し辛い。レベル上げをサボったRP Gみたいだな、なんて思う。が、ゲームと違い実際はたいそうな技も何もない。

「近いと思うわ」

少し顔色が悪いシエラが、ぼつりと呟いた。護符は渡したが、それでも明らかに霊力が削られているんだろう。俺や小唄は、セイムルーダの言つとおり影響されていないようだった。

「大丈夫？」

少し心配になり、シエラの顔を覗き見る。シエラは微笑みながら小さく頷き、これがあるからルビーの指輪で飾られた手を上げた。

「ギャオオオオ！」

突如、地を揺るがすような雄叫びが聞こえる。全員がその雄叫びの方向を見上げれば

白い、竜がいた。

ドラゴンとか、そんなものを実際に目の当たりにするとは誰が思うだろうか。明らかに人間を数人は丸飲みできそうなそれは、巨大な尾を振り回して周囲の岩を叩き壊す。……当たったらひとたまりもないな。

「すげー……勝てる気しないぞ」

小唄がげんなりした様子で呟く。俺も同感だが、シエラもそうらしい。素数なんか数えだしている。……2が抜けたぞ。

「……避けたほうが得策か？」

『……いえ、寧ろあれが目標のようです』

……………。

俺の呟きに、セイムルーダから衝撃の事実が告げられた。つまり、なんだ。混沌石って生き物なのか？んなまさか。

『あの竜の体内に混沌石がありますわ。暴れているのは、そのせいです』

なんとというお先真つ暗感。横を見ると、さすがに小唄が涙目で俺を見る。……今回はお前がそんな顔しても文句は言われなによ、うん。

「そーかー、混沌石、あいつの腹んなかか……」

隣でまだ素数を数えていたシエラが、目を丸くして俺を見る。そりゃそーですよ。

「あんなの、どうやって相手にするんだよ」

ダメ元でセイムルーダに聞いてみる。少しだけ考え込んだのか、

セイムルーダは間をおいて答えた。

『上空から頭を狙えば、多分……。振り回されるでしょうが、隙はできます』

おいおいおい。

そんな超人みたいなことしたら普通振り切られてどっかに落ちて死ぬだろ、あの竜、身長5Mは堅いぞ。

ゲームの世界ならここで魔法使いがドラゴスレイヤー！みたいに大技出して一件落着なんだが、その魔法使いの小唄はカタカタ震えてるし。かといって、逃げることは出来るが、そうしたら俺達の目的もシエラの目的も達成できない。

改めて、現実は厳しいと再認識する。が、流石にこの状況で突っ込むのは得策じゃない。

「……二人ともちよつと、一回引くぞ」

俺は小唄の背中を押しながら、どこか安全な場所はないかとあたりを見る。ちよつと、隠れるには最適の一角が見つかった。そこに全員で逃げ込むと、ようやくシエラが口を開く。

「ほんとにあの中なの？間違いじゃない？」

「それが間違いじゃなくてさ……」

間違いもなにも、セイムルーダが言うならまず確実なんだろう。

その辺は小唄に適当に説明させるにしても、だ。

「あれがあるから、今まで探しに行った人間達が帰って来なかったのね」

今にも帰りたいたい気分で行開策を練っていると、シエラがさらに帰りたくなることを呟く。横目に小唄が青ざめているのが見えた。

「ど、どういうこと？」

「レダノの調査部隊が何度も混沌石の場所を探りに行ったけど、全員行方不明なの。……たぶん全滅したのね」

ますます悪夢だ。そんなにヤバいもの、どうやれっていうんだ。

こちらら女一人に高校生ふたり、しかも半熟どころじゃない生卵だ。どうがんばっても勝てる気がしない。

『落ち着いて下さい。あの竜は飛べません。それに、混沌石のせいで貴方達の気配は上手く察知できないはず』

「落ち着けって言われても……」

俺がセイムルダと話しているとは知らないのか、シエラが一瞬不思議な顔をする。ヤバいと思っただけなんでもない、とごまかすと、セイムルダは止めていた言葉を再開する。

『全員で突っ込むのではなく、分散するのです。誰を狙えばいいか解らなければ、相手も確実にひるみます』

「挟み撃ちか！」

ようやく、働いていなかった頭がセイムルダの意図を理解する。思わず口に出せば、シエラと小唄が互いに顔を見合わせた。

「でも、どうやって後ろに回り込む？」

「振り向いている間に、私が背後に回るわ。走るのは得意なの。作戦を考え出した俺達に、シエラが背後に回る役を買ってでる。」

確かに、この中では彼女が一番素早い。

「なら、全員スピードアップだ！」

やっと恐怖から脱したらしい、小唄は俺とシエラの手を握る。と、いきなり身体が軽くなる。どうやら、今の言葉自体が言霊の役割を果たしていたらしい。

「小唄はまだ出て行かないで、シエラが後ろに回ったら援護だ」

「りょーかい」

ぱちん、と互いに手を叩き、気合いを入れる。にわかパーティーが団結した瞬間かもしれない。

飛びだした瞬間、俺はドラゴンに向けて挑発の口笛を吹く。白く翼のない、のっぺりした皮膚には小さな鱗がびっしりと生えているらしい、太陽の光が反射して不思議な色になっていた。

同時に背後から並んでいるシエラが、タイミングを見計らい俺とは反対方向に走り抜ける。早い

小唄の言霊があるからとはいえ、それでもかなり本気なんだろう。尻尾の上を軽々飛び越え、彼女は簡単にドラゴンの背後に回り込んだ。

その間俺もただ逃げては居なかった。シエラが居ることに今気付かれてはならない。小唄の準備が整うのに、あと十数秒。

小唄がどこにいるかはあらかじめ知っていたから、あいつが飛び出すタイミングも作らなければならない。そんな事をしていると、シエラがかけ声とともに、竜の尻尾を一部切り落とした。

いきなりの痛みに、ドラゴンは首だけ後ろを振り向く。今だ

「よし、伏せる！アイシクルランス！」

なかなか言霊が様になったじゃないか、思いながら俺はしゃがむようにして伏せる。白い竜は、接近してくる冷気に気付くと慌てて振り向いた。

その口を、氷の槍が襲う。鋭い絶叫が渓谷にこだました。

顔部分に氷の槍が突き刺さる姿はすいぶん痛々しいが、そこで同情することはできない。あの竜も、沢山の人を犠牲にしたんだ。

シエラが竜の背中に飛び乗る。その剣が、人間で言うなら首のあたりを突き刺した。おそらく、動きを封じるためだ。

「小唄、もう一度！」

俺はまだ伏せながら叫んだ。それに素早く反応し、小唄が氷の槍をドラゴンの腹に放つ。それが着弾する前に起きあがると、俺はできるだけの速度で走る。

ちょうど氷の槍が命中し、腹から下を凍り付かせた竜に、俺は剣を突き立てた。

重い音を立てて、竜が倒れる。ほっとしたのもつかの間、竜の身体が光り始めた。

「な、なんだ？」

慌てて剣を引き抜くと、そこから血が噴き出す。竜自体は絶命し



ているのか、ぴくりとも動かない。

「これは……」

光の中心を見て、シエラが目を見開く。同時に、俺達も。藍色に輝く、宝石のような石。それは、あの日この世界に来る直前に見た

『あれが混沌石です。　倭さん、その剣で破壊してください』

既視感のあるその石は、やはり目的のものだった。嫌な予感が、する。

「　理科室にもあった」

『

俺の言葉に、セイムルードが沈黙する。たぶん、言葉が見つからないのだ。

どさり、何かの倒れる音。見れば、シエラがうつ伏せて倒れていた。限界だったのかも知れない。小唄が慌てて、倒れたシエラに駆け寄った。

「　なんで、なんでなんだよ　！？」

たぶん、そのとき俺は泣いてたんだと思う。それでも、目の前の石を破壊しなければならない。歯を食いしばって石を睨み、銀の剣を振り上げて叩きつけた。

## #007：別れと再会

目の前に二つにわかれ落ちた藍色の石が、灰へと色を変えていく。そのとき俺は、ようやく自分の目から涙が溢れていることに気がついた。

「倭やまと」

呼ばれるままに顔を上げると、小唄こづたが心配そうに俺を見つめていた。その手が、俺の頬に伝い落ちる涙を拭う。

「小唄……お前も、見たよな」

「……うん」

灰色の目がすこし細められる。短い返事には構わず、俺は言葉を続けた。

「なんで、俺達の世界にもあんなんがあったんだよ。もしかしたら、今、向こうはとんでもない事になってるんじゃないのか？」

「倭やまと」

何度か、軽く頬を叩かれる。目を覚ませとか、落ち着けとか言いたいらしい。

「大丈夫だ。戻ったらあれも、ぶっ壊してやればいい。そうだろ」

俺の不安を紛らわすように、小唄は頭を撫でてくる。けど、壊せなかつたらどうするんだよ？

「壊すんだよ。何が何でも」

静かだけど、力強い声。一瞬、目の前にいる小唄が別人に見えた。「なあ、見るよ倭。お前がああ石壊したから、植物がどんどん息を吹き返してる。俺達の手でやったんだぜ」

示されるままに顔を上げれば、さつきまで荒れ果てていた溪谷が、俺達を中心に緑に染まっている。

足元に生い茂る草や、所々咲く花。霊力が流れ始めたのか、上流から流れてきた水がすぐ近くに川を作り始めている。

「  
」  
まるで、毎日撮影したビデオを高速で回しているみたいな光景は、さっきまで混乱していた頭には衝撃的だった。

「う……、ん」

小さく呻く声が聞こえた。振り向けば、倒れていたシエラが起きあがるところだった。額を押さえ、数秒しないで顔を上げた彼女は、やはり驚いたようだった。

「これが、混沌石が吸収していたケイオーストロン霊力マナ？」

周囲を見渡して、シエラはあつと声を上げる。彼女の視線の先には、青い星の花　フェリシアが咲き乱れている。

「これで、薬が沢山作れるわ。あなたたちのお陰ね」

嬉しそうに花の前で微笑むシエラを見て、俺はようやく笑みがこぼれた。

ミルダの街は、最初に来た時から全く様相を変えていた。枯れた大地だったはずの地面は、青々とした芝生で埋め尽くされている。通りでは、元気を取り戻した人たちが嬉しそうに皆で抱き合ったり、泣いて喜んだりしていた。

『混沌石で失われた霊力がすべて戻ったわけではないですわ。けれど、すぐに全てが元に戻るはずですよ』

セイルルダが嬉しそうに呟く。たぶん少しは、彼女にも力が戻ったんだろう。

「　とりあえず、今日はもう疲れたわよね？宿も使えそうだし、休みましょ」

シエラの提案には賛成だった。二日も慣れない場所で歩いた上、野宿までしたせいか体中筋肉痛だ。一番はあの竜のせいな気もしいではないが。

宿に入ってそれぞれ部屋を取る。宿泊名簿に名前を書くらしく、どこになんて書けばいいのか解らない。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

俺と小唄がまごついてっていると、先に終わったシエラがこちらをのぞき込む。案の定、小唄がフォローした。

「俺達、この地方の文字は書けないんだ。かなり遠くから来たから」  
あははと笑ってごまかす小唄に、シエラはそれ以上追求せず  
俺達の名前を書いてくれた。世界樹の麓では店の人が名前を聞いて記入してくれたが、こんな方式の宿もあるなら名前くらい書けないと困るな。

シエラの書いた文字を見ながら、俺は見慣れない記号の羅列を記憶する。明日には忘れてそうだから、後でメモしないと。

なんて思いながらも、俺も小唄も部屋に入った瞬間にベッドに身を投げる。タイミングまで同じなところが、疲れを物語ってる。

「大丈夫ですか？お二人とも」

セイムルーダが心配そうに聞いてくるが、大丈夫とも大丈夫でないとも言えない。とりあえずは明日まで休みたい。

「体中筋肉痛で辛いや」

溜息と乾いた笑いが、隣のベッドから聞こえる。毎日そこそこ鍛えてる俺でも大分きついんだから、小唄なんか辛くて当然だ。

暫くそのまま会話していると、いつの間にか寝てしまっていた。

帰りの馬車は快適だった。というのも、シエラが回収したフェリシアを運ぶために、良い馬車を選んだからだ。ふかふかの椅子はがたがた揺れることなく、馬車自体も車輪がかなり衝撃を緩めるものらしい。

その分、帰りは二倍以上の乗車料で高く掛かったが、これなら文句はない。

「あなたたち、戻ったらどうするの？」

フェリシアの花を保存した箱をしっかりと持ちながら、シエラは訊

ねる。戻ったらまた、違う場所。次は反対方向だったか、目撃情報頼りに混沌石を探す。だが、小唄に任せっきりな俺は地名が出てこない。

「次はクラダ草原のほうに行くつもりなんだ」

いつの間にかマーキングとメモが書き込まれた地図を開いて、小唄は次の行き先を示す。他にもまだマーキングされた箇所はあるが、どうやらそこが一番近いようだ。

「レダノの方向ね。また混沌石なの？」

「うん、今の旅の目的だから」

頷いて、小唄は地図をしまう。相変わらず、ごまかし方というか嘘の継続が上手いというか。シエラ自体も俺達に対して必要以上に質問をしないところもあるが。

「すぐに出発するのかしら」

不意に、ほつりと寂しそうな声がこぼれた。そういえば、シエラは依頼のためにミルダの渓谷まで出向いたんだ。だから、世界樹の麓に着いたらお別れなんだ。

「特に、街には用がないからな。そのまま行くつもりだけど」「そう……。なら、仕方ないわね。でも、依頼主にはあなたたちの事も話そうって思うの。ふたりが居たから、この花を持ち帰れたんだもの」

出会ったときと同じ笑顔を浮かべ、シエラは膝に乗せた箱を優しく撫でた。なんだか嬉しくなり、俺も小唄も笑いながら頷いた。

シエラと別れ、俺達は地図を見ながら街道を歩く。基本的に街からそれているクラダ草原行きの馬車は無いらしく、こうして歩かない。

野宿確定のため、食料と簡易テントは揃えた。制服はあんまり無茶して破ったりすると困るから、畳んでザックの中。その代わりに着ている服は、もうこの世界の住人と言われてもおかしくない民族

的な綿の服。シャツ一枚に上着とマントという俺に対し、小唄はワイシャツに黒いロングコート。マントは邪魔だったらしいが、正直俺にはそっちのほう動きにくそうだ。

小唄は地図を見ながらひたすら方角を確認する。慣れない世界の地図なんてそう簡単に読めるわけがない。それでも、確実に目的地には近付いているようだ。

『荒れていますわね』

不意に、シエラが居たときに黙り癖がついたらしいセイムルダが呟いた。彼女が示しているのは、目の前の荒野のことだろう。もしかしたら、ここも昔は豊かな土地だったのかもしれない。

「クラダ草原つてもっと先なのかな。もう着いてて良いはずなんだけど」

困った顔で小唄が頭を掻く。確かに目の前はただの荒野だし、見えるのは乾いた土だけで何も無い。遠くにつつすら街が見えるが、見るからに世界樹の麓とは雰囲気が違う。シエラが言っていたレダノって国かも知れない。

『多分、ここがクラダ草原ですわ。……かなり様変わりしていますけれど』

セイムルダが神妙な声で、だがあっさり地名を告げた。草ひとつ無いその荒野が、何故こんな姿に。そんな理由は考えるまでもない。

「ただっ広い荒野をしらみ潰しか……長いこと掛かりそうだな」

げんなりしながら、俺は荒野をひと眺めする。道らしきものはなく、本当にしらみ潰しのようだ。

『少なくとも、北の方角ですわね。まだ遠いので余り詳細には解りませんが』

「……北つてどっちだ、小唄」

セイムルダが位置を絞っても、当然ながら方角なんかわからない。地図を持っている小唄も、何となくでここまで来てしまったせいか自信なさげだ。

「……あ、あつちかな？」

『……もつと右ですわ』

先が思いやられるとばかりに溜息を吐き、セイムルーダはペンダントの表面に方角を示した。さしずめ狂わない方位磁石なんだろうが、そんな便利な機能があるなら早く使って欲しかった。

「こつちか。とりあえず、進めるだけ進もう。獣やら魔獣もないようだし」

小唄が方角を確認して歩き出すが、何となく嫌な予感がする。元草原とはいえ、このあたりに馬車が全く通らないのはそれなりの理由があるんじゃないだろうか。

「どうしたんだ？ 倭……って、うわっ！」

歩きだそうとした小唄が、考え込んでいる俺のほうを振り向く。

瞬間、その片足が地面に埋まった。

『いけません、すぐにそこから足を離して下さい！』

「え、えっ！？ でもどうやって」

慌てる小唄に、俺はすぐに近寄って地面に少しだけ埋まった奴の足を掴む。バランスが取れなくて抜けいんだろうそれを無理矢理引き上げると、小唄が悲鳴を上げて尻餅をついた。

「何情けない声」

からかいかけてふと足元を見た瞬間、俺は凍り付く。

小唄の足のつま先、そこに、異様なものが食らいついていた。靴を噛みちぎる勢いでうねうねと動くそれは、まるで口のついた芋虫みたいだ。

「な……、なんだよこれ！？」

「や、倭あゝっ」

泣き声混じりに震える小唄には構ってられない。俺は剣を抜くと、小唄の足に噛みついていてるそいつを途中から切り裂いた。なんだか粘りけのある赤い血を噴き出し、芋虫（仮）は残りの体を穴に引っ込めた。

「うわわわっ」

慌てて、小唄が残った頭の部分たぶん……を振り払う。靴に噛み痕はあったが、どうやら貫通はしてないらしい。

「今のはワームですね。ああして穴を掘って、巢穴に落ちる獲物を待ちかまえていますの。比較的弱い魔獣ですね」

どうせ何とかなる位には思っていたんだろう、セイムルーダが冷静に芋虫……じゃなくてワームについて解説する。早く言ってくれ。心臓に悪い。

「ケガないか？」

俺は剣をしまつて小唄に手を差し出す。まだ転んだままの小唄が、大丈夫と手を握った。

「ありがとな」

余程驚いたんだろう、小唄は立ち上がった瞬間いきなり抱きついてきた。これ自体はあんまり珍しい事じゃない。

「こら、今みたいのがどこに居るかも解んねーんだから。しゃきつとしろよ、しゃきつと」

ポンポンと背中を叩けば、小唄は小さく頷いて俺から離れる。まだ小唄が俺より背の低かった頃から、この流れは変わらない。

「あら。仲良いのね、ほんとに」

何とか落ち着いてきた俺達の背後から、聞き覚えのある声が聞こえた。

振り向けばそこには、数日見慣れた亜麻色。あまりに突然のことで、俺達は互いに顔を見合わせた。

「えーと……シエラ？」

昨日別れたはずの彼女が何故こんな場所にいるのか、俺達にはさっぱりわからない。が、背後に馬を連れているのを見るに、ここまでその馬で来たのは間違いない。

「追いつけて良かったわ。実は、レダノへの安全な通路が封鎖されてるのよ。途中の橋が崩れちゃったらしいけど、開通するまで二週



間ですって。信じられないわ」

それでこっちに来たってことは、ここからレダノまで向かう積もり何だろうか。しかし、混沌石があるこの荒野を通り抜けるのは無謀。だから俺達を追ってきた、そういうことらしい。

「これも返してなかったものね。まあ今外したら困るんだけど」

苦笑しながら、シエラは指を飾るルビーの指輪を見せる。どちらにしてもあれはサイズが彼女用だから、他の奴には使えないんだけど。

「協力するわ。ここを通り抜けてレダノまで行けば、世界樹の麓より沢山の情報が手に入る。……悪くないでしょ？」

はじめて出会ったときのあの笑顔で右手を差しだし、シエラはウインクする。俺は一瞬小唄のほうを確認してから、その手を握った。そして、またもや俺達とシエラの不思議パーティーが結成されたのだった。

## #008：荒野の主

シエラの馬に荷物を乗せ、俺達は北へ歩いていった。流石に混沌石ケイオーストーンの影響があると、セイムルーダがこつそりと作ってくれた護符を馬にも装着して。

荷物が無いってのはなかなか気楽だ。が、今まであったものがないせいか違和感はかなりある。

「……それにしたって、ここまで徹底的に搾り取られてると、クラダ草原じゃなくてクラダ荒野に地名を変えたくなるわね」

シエラの冗談に、俺はシャレにならないなと思いつきながら同意せざるを得ない。

敵が少ないのも、立地のせいだろうか。荒野としか言えないそこでは、まともな生物が生きていけるとは思えない。そもそもがこれだけ開けた土地だ、敵に丸見えの草原に住む生き物なんて知れている。ワームの巣穴が大量にあるのは、小動物や虫を簡単に捕食できるからなんだろう。が、ワームは巣穴を刺激しない限り出てこないで、実際のところ戦闘はほぼ皆無だった。

「こんだけ敵がいらないなら、今回はラクそうだな。もうドラゴンなんか勘弁だぜ……」

先日を思い出し、小唄こつたがげんなりとした表情で呟く。それを見ながら、シエラがくすくす笑い出した。

「確かにドラゴンは二度と嫌ね。でも、ドラゴンを倒せた人間なんかそうそうお目にかかれないわよ」

「それが三人も揃ってるのはまさに奇跡、ってか。……あんまり嬉しくないな」

正直、生き物を犠牲にして名声を得る気は毛頭無い。強さつてもには限りない憧れを感じるし、そのために体を鍛えてもいたけど俺の欲しい強さは、ゲームみたいにモンスターを殺してレベルアップするようなタイプじゃない。とはいえ、鍛えだしたきっかけ

は特に覚えてない。まだ小学生でもなかったところからの記憶なんか、覚えていてもアテにはならないだろうが。

「近いわね」

シエラが唐突に呟いた。俺や小唄は影響を受けないせいか、未だに近いのか遠いのかよくわからない。

『確かに近くにあるようですわ。……けれど、これは……』

セイルルダの声が頭に響く。頼むからそんな深刻そうな声音は止めてくれ。無駄に不安になる。

『地面の下を、動いています』

「へ？地下？」

慌てて俺は足元を見る。特に変哲もない地面だが、こんなに乾いた場所で地中を動けるもんなんだろうか。それとも何か空洞化しているところがあるのか。

『移動しているというか、何か生き物に動かされているような……』

結局、ものすごく嫌な予感も当たってしまったらしい。この荒野で地下を動ける可能性がある生き物なんてわかりきっていた。

「地下……って、どういうこと？」

シエラも嫌な予感を覚えたのか、笑顔がひきつっている。そりゃそうだよな。

「……やっぱり敵はいるみたいだ」

げんなりした様子で小唄が肩を落とす。全員良い感じに帰りたいオーラがみなぎったところで、同時に溜息。こんなところで息が合わなくても……。

ザザザアツ

唐突に、砂を落とすみたいな音が響いた。びくりと震え、俺達は周囲を慌てて見渡す。

「……な、何かいるわよ」

解りきっていることだが、それをあえて再認識するかのよう

エラが呟く。背筋に嫌なものが来て、俺はとっさに叫んだ。

「バラけるぞ！」

シエラはさすがというか、即座に反応する。馬を安全な場所に放し、俺も小唄もその場に散開する。と

ザバツ、という小気味よい音を立てて、俺達が立っていた辺りが盛り上がり、上空にむけて土砂を撒き散らす。その中心には

巨大なワーム。

ダメだ、最初に見たアレもかなり気持ち悪かったのに、でかいって……でかいって反則だ

想像してみてください、明らかに人一人簡単に飲み込んでしまいそうな巨大な芋虫もどきを。俺達の恐怖が量り知れるだろう。

『あれですわ！中に混沌石を宿しています！』

「よりによってあんなんが飲み込んでんのかよ！？」

セイムルダと会話しているつもりだが、うまいことシエラまで状況が把握できたらしい。たぶん、そうなるようにセイムルダが言葉を選んでいるのだろう。

「厄介だわ、潜られないうちに倒すわよ！」

シエラが剣を抜いて叫ぶ。俺もそれに倣うように剣を抜くと、地面から半身を出しているワームに切りかかった。

が、巨大なワームの皮膚にはほんの少しの傷しかつかない。でかいだけあって、やたら丈夫なようだ。

「……魔法のほうが効果あるかもしれん」

飛び退いて小唄に目配せする。近くではワームの頭に向けて、シエラが魔法を放っていた。

俺の視線に気付いたか気付いてないか、小唄は両手を胸の前でかざして、その間の空間に何かを生み出した。それが炎になり、小唄の目の前に大きく広がると

「フレイム！」

言葉スベルによって、焔が渦を巻き巨大ワームに襲いかかる。巻き添えにならないように飛び退くと、容易には動けないらしいワームに見

事に命中する。

言葉では表せない、しかし聞くに耐えない悲鳴を上げてワームが悶える。火消しのつもりか、体を地面に叩きつけようとしたその下から、慌てて脱出する。こんなんに潰されたら一巻の終わりだ。

ドスンとかいう音じゃ済まない音を立てて体を地面に叩きつけるワームに、小唄が追い討ちのようにまた言霊を發した。

「アイシクルランスっ！」

火に氷に、ワームも忙しいな。なんて思いながら、俺は見事着弾した魔法で凍りついたワームに突っ込んでいく。凍っている場所なら、剣も貫通するはずだ。

「アイシクルっ！」

タイミングよく、シエラがワームの巣穴を凍り付かせる。これで氷が溶けるまでかなりかかるはずだ。

ありきたりなかけ声とともに、俺はワームの上に剣を突き立てる。が、貫通しきるはずもない巨体がそれで簡単にやられてくれるはずはない。凍り付きながら俺ごと頭を振り始めるのは、気持ち悪くて見たくないけど見なきゃならない。

「もう一度　！」

剣を引き抜けば、そこから粘りのある液体が噴き出す。血なんだろうが、あんまり浴びたくない。が、それに構って居ては何も終わらない。

俺はもう一度、剣を突き立てようと構えた。が、ワームの体力のほう氷より上手だったらしい。いきなり、上に乗った俺ごと頭を持ち上げた。

「な……っ！」

とっさに何をするにも出来ずに、俺はあえなく振り落とされる。地面に背中を強打して、息が詰まった。

「倭っ！」

小唄が叫ぶ。明らかに心配されたな　思いながら、顔を上げ硬直した。

目の前に広がる、臓器の内壁のような赤いもの。円形にそれを縁取る、無数の細かい牙。それが、あの巨大ワームの口だと気付いた時には、情けなくも腰が抜けて動けなくなっていた。

「あ……」

「倭っ！」

動けない俺に、小唄が駆け寄る。目が存在しないらしい巨大ワームが、小唄のほうを振り向いた。

「大丈夫!？」

腕を誰かに捕まれ、その場から離された。シエラが引つ張ってくれたらしいことを認識し、俺はようやく安堵する。

「ごめん」

「小唄くんを援護するわよ」

シエラに一言謝って、俺は一緒に飛ばされた剣を拾う。目の前では、小唄が巨大ワームに氷の魔法を放っていた。

ほんの少し足が震える。さっきの恐怖があまりにも鮮明で、振り切るように剣を構える。

『かなり弱っているはずですよ!』

セイルルダが、俺の頭の中で叫ぶ。ペンダントが光って、体が軽くなった。たぶん、何か魔法をかけてくれたんだろう。

「これなら……いける!」

今時ゲームや漫画で使い古された典型的な台詞がこぼれたが、実際に言いたくなる気持ちはよくわかる。何か特殊な理由がない限り、これくらいしか言い様はない

「小唄っ!」

すっかり氷を振り払って暴れるワームに、俺はサイドから突っ込んでいく。すぐ横を冷気の塊が、俺よりも素早く飛んでいった。シエラの魔法らしいそれが、俺がさっきつけた傷のあたりを凍らせた。

いいタイミングだ

思いながら、俺はそのまま横から巨大ワーム

の頭を貫いた。

藍色の石を、剣で砕く。みるみるうちに灰色になっていく石に反して、俺を中心に大地に緑が広がっていく。

今度は倒れなかったシエラが、座り込んだ俺の肩に手をおいた。背中はずきりと痛みが走る。

「あつちに、湖があるはずなの。きつと水が戻ってるわ」

彼女が何を言わんとしているかはよくわかった。が

「倭っ!?!」

返事を返すまもなく、俺はその場に倒れてしまった。

\* \* \* \* \*

いつものように、帰りに友達と遊んで日が暮れる。そんなこと、子供ならみんなそうなんだろうと、俺は思っていた。

だが、そいつは違ったんだ。

「なあ、けーいち。アレ見ろよ」

友人の一人の声に、俺はその指のさす方向を見る。公園のそばを、重そうな鞆をさげて歩く一風変わった子供がいた。まだ俺よりも背が低く、くすんでいるがちよっときれいな金色の髪。気弱そうに下を向いて歩くそいつを、周りが冷やかし始めた。

「あれ、外人だよな。はじめて見た」

「おい、そこのお前!」

たぶん、奴らはなんにも考えてなかったんだと思う。金色の髪の毛、たぶんあんまり歳も変わらない相手が珍しかった。そんなところか見たことのないそいつに友人たちが駆け寄っていくから、俺もその後ろについて行く。新しく友達が出来るとも知れない、そんな期待で俺はそいつを見た。

声をかけられた理由を知るはずもないそいつの目は、ほんのすこ

しおびえていた。灰色の瞳が俺達を順に見て、割と自然な日本語を発する。

「な……なにか、用？」

周りはみんな、彼より背が高い。怯えるのも当然だと今なら思える。

「なあなあ、どこの国から来たんだ？アメリカ？」

「え……、ぼ、僕は、外国人じゃないよ」

不躰な質問に、彼は泣きそうになりながら答える。それが信じられなかったのか、友人はその金色の髪を軽く掴んだ。

「じゃあなんで金髪なんだよ、染めたのか？」

「痛つ……そんな事してないよ……、離してよお」

さすがに、俺は友人の間に割って入って、そいつを背中にかばった。髪を引つ張るなんて、いくら何でもやりすぎだ。

「やめるよ、これじゃいじめだろ」

「何だよ、俺はほんとの事聞きたいだけだろ！」

子供なんて、それが間違いでも認めたがらない。既に泣き出している金髪の子を見て、俺は自分の髪を指さした。

「引つ張つたくらいで染めたかどうか解るなら、俺のも引つ張ればいいだろ！お前らどうせ、俺も染めてると思ってるんだろ」

鮮やかな赤い髪。それは俺の後ろで泣いてるあいつと、共通していた。日本人離れしてる、と。

さすがに、この中では一番の力持ちの俺に対してみんながそんな事を出るはずがない。やるならやれって思っただけだけど、全員黙り込んだ。

他の奴らと別れて、俺は金髪の子 雅 みやび 小唄と、公園のベンチに座っていた。聞けば父親がアメリカ人だが日本生まれで、ずっとこっちで育つたらしい。

「……さっきは、ありがとう」



恥ずかしそうにしながら、小唄は俺を見る。きれいな灰色の目はたぶん、父親に受け継いだんだと思う。

「いいよ、俺達が悪かったんだし。痛くないか？」

「うん、大丈夫……えっと」

「倭だよ。やまと、けいいち。呼びやすいから倭でいいよ」

ようやく自分の名前を教えて、俺は小唄に手を差し出す。その手を、小唄が握った。

それが、俺と小唄の出会いだった。

\* \* \* \* \*

懐かしい夢を見たあと、俺はゆっくりと起き上がった。非現実的な夢から小さい頃の夢を見るなんて、随分寝ていた気がする。

が、目覚まし時計を探そうとして、俺は一部が夢でないことに気付く。

木造の知らない部屋、時計もあるはずはなく、あるのはベッドの脇に置かれたザックと、椅子に掛かった服やマント。

そして ベッドの脇には小唄が突っ伏して眠っていた。

『目が覚めたのですね』

ほんのわずか気遣うような声音で、セイムルーダが話しかけた。俺は辺りを見回して、ベッドの脇にあるペンダントを手に取る。

「俺、どうしてたんだ？」

ペンダントに向かって問いかける。端から見れば変な奴に見えるだろうが、ペンダントの琥珀の向こうには彼女がいる。

『ケイオスストーン混沌石を砕いたあと、倒れてしまったのですわ。……二日ほど眠っておいりました』

二日

それで、小唄こづたがベッドの横なんかで寝ていたわけか。相変わらずの心配性だ。

『小唄さんは貴方が倒れてからずっと、治癒の言霊スベルを使って下さったり、ここまで運んでくれたのですよ』

小唄にしては頑張ってくれたらしい。たしかに、あるはずの体の痛みは殆どないし、調子も悪くない。俺は突っ伏したままの小唄を見つめ、ほんの少し金色の髪に触れた。

「……サンキュ。でも、こんなところで寝たら風邪引くぞ」

苦笑して、俺は軽く小唄を揺する。俺はもう平気なんだから、せめてベッドで寝て欲しい。

「ん……」

が、予想以上に小唄は目覚めが悪い。毎回学校を遅刻しかけているのはこの目覚めの悪さが原因なんだろうか。

『一緒に寝られてはどうですか？』

「……は？」

唐突に、セイムルーダが意味の解らないことを囁く。

家族ならともかく、友人とふたりで寝るといふのには抵抗がないわけ無い。しかも、よりによって小唄だ。

「一緒につて……」

『わたくし、何か変なことを言いましたか？』

きよとん、という擬音がぴったりくる声音で、セイムルーダは不思議そうに呟く。そういえばあんまり意識はしていないが、こいつは人間じゃなくて聖霊だ。俺達の間とはすこしどころかかなり離れた部分がある。

これもそのひとつか……思いながら、俺は小唄から手を離す。

「普通、人間は友達と一緒に寝るって事を恥ずかしがるもんだ」

『……そんなものですか？』

ベッドの脇にペンダントを置いて、俺は小さく頷く。それから、両腕で小唄を抱きかかえた。この部屋が一人用ってことは、小唄にも部屋はあるはずだ。けど、そこまで連れていくよりはここで寝かせたほうがラクだろう。

『恥ずかしいのでは？』

「……風邪引かれるより、いいよ。ところで、シエラはどうしたんだ？」

ベッドの半分に小唄を寝かせ、俺はまたペンダントを手に取る。

それから、不意に気になったことを聞いてみた。

『シエラさんは隣の部屋を借りていますわ。すぐに別れることも出来たようですが、<sup>ひま</sup>倭さんが心配らしく、目覚めるまではと行動を共にしていました』

つまりはここは、レダノって国の宿屋かどこかのようなのだ。世界樹の麓なら、木の根っこ位飛び出してるはずだし。

「……シエラには迷惑かけたな。あとで謝らないと」

溜息を吐き、俺はそつと小唄の隣に寝転ぶ。気を使わなくても起きないだろうが、だからって遠慮なしも良くない。

『眠られますの？』

「……ああ。まだ外も暗いし」

窓の外を見ながら、俺はふと、空に当たり前のように浮かんだ三つの月を見る。この世界には、月が沢山あるんだろうか。

「……あれ、全部月なのか？」

『はい、中央の月はルノー、左右の小さな月はそれぞれメラとミラ。人間の間では様々な伝承がありますが、事実のみを述べると、ルノーが惑星でメラとミラが衛星なのです』

いきなり宇宙的な話になったな、などと思いながら、俺はふと、月にしては色があるなと思う。なんとなく地球を彷彿とするルノーの星は、色鮮やかな緑と青だ。

「ルノーにも人はいるのか？」

『あら、よく気付かれましたわね。ルノーはわたくしの妹なのですわ』

……。

何だか寝しなに聞くような話ではなくなってきたぞ。

「……解るように説明を」

『あら、ごめんなさい。……ルノーはここ数千年で生まれた、若い惑星なのですわ』

俺が説明を求めれば、セイムルードは俺にも解る言葉を選んで話し始めた。

セイムルードの月、ルノー。

その世界樹の聖霊ルノーは、およそ四千年前に誕生した。

セイムルードとその父エンリス 太陽らしい は、自らの霊力をメラとミラの衛星とし、ルノーをふたつの月で照らしたという。そのため、ルノーには朝や昼間が存在せず、人々は常に月明かりの下で暮らしているらしい。

『ルノーの住人たちは、ここセイムルードの住人とはやや異なります。まず、耳が長く、個人により形状は異なりますが尻尾を有しておりますわ。それ以外は、貴方達と変わることはありません』

ようは、ここよりもさらにファンタジー寄りな惑星らしい。だが、彼女がその住人の外見を知っているのはどう言うことだろう。

『わたくし達は、それぞれと繋がっております。わたくしがルノーに顔を出すことも、エンリスに顔を出すことも、容易だったのです』  
「だった？」

最後の言葉が引っかかる。わざわざ過去形にするのは、今は出来ない理由があるのか。

『混沌石です。わたくしは大量の靈力マナをあの手に奪われ、急いでエンリスとルノーから繋がりを断ったのです。

混沌石は、どのような世界にも関係なく現れます。……とりわけ、その世界と近い関係にある場所、同じ靈力の流れを共有するふたつの世界には必ず出現するでしょう』

だから、エンリスとルノーから靈力の流れ　繋がりを断った。その説明を続けるセイムルーダの声は、なんだか酷く悲しげだ。

「俺達の世界は、どういう関係なんだ？」

悪いと思いつつも、俺は以前から気になっていたことを訊ねる。なぜ、セイムルーダは俺達の住む世界から、わざわざただの人間を呼び出したのだろうか。

『それは、貴方達の世界　地球テハが、わたくし達とは全く異なる性質の惑星だったからです。他にもそのような惑星は無数にあります。が、とりわけ、地球の力は強エンジーかったですわ』

つまり、俺達は漫画やゲームでよくある別次元とかの世界ではなく、惑星間を移動した、ってことなんだろうか。

「だいたいわかったけど、なんで俺達だったんだ？」

俺はそう質問しようとして、間隣から一足先に全く同じ質問が飛んだことに気付く。

「小唄！？いつから起きて……」

「普通、人間は友達と、のあたりかな」

ちよつと待て。つまりなんだ？俺がわざわざベッドに寝かせてやるときのこいつは狸寝入りだったのか？

「いやー、起きるタイミングが……って、こらこら倭くんそんな怖い顔しない」

あはは、なんて笑いながらごまかそうとする小唄に、俺は呆れて言葉も出ない。

『……お二人を選んだのは、絆の強さですわ』

タイミングを見計らったつもりなのか、セイムルードがくすくす笑いながら呟く。俺と小唄は顔を見合わせて、何度か瞬きを繰り返す。

「絆……？」

『……はい。何度も地球の側をさまよいながら、わたくしは絆がより深い者たちを、世界樹の神殿へ呼び寄せていました。そして、わたくしの呼びかけに応じてあの聖堂までたどり着いたのは、貴方達ふたりだけだったのです』

つまり、俺達は自分から巻き込まれてしまったわけだ。そのあたりは今更考えても仕方がないが、呼びかけに応じなかった連中はなんだったんだろう。

「絆なあ。見えるものな訳？」

『いえ、けして見えるものではありませんわ。絆というものは、感じるからこそその繋がりですもの』

小唄の軽い疑問に、セイムルードはどこか嬉しそうに語る。

「倭と俺の絆……か。はは、でも確かにそんな大層なもの、無きや困るっつーかあって当然だよな」

やたらに確信したような口調で、小唄は俺の肩を叩く。同意を求めているんだろう。

「……そうだな。でも小唄の場合、そこに腐れ縁とかも含まれてそうだよな」

わざと意地の悪い笑みを浮かべてそう言えば、小唄は「ひっでー」とけたけた笑う。こういう、言わなくても互いを理解する事も絆がもたらすものなんだろうか。

「さて、絆も深まったところで、朝まで寝ようか」

にこにこしながら、小唄が提案する。欠伸をかみ殺しているのを見ると、まだ寝たりないんだろう。

「そつだな……寝ようか」

俺もまだ疲れがあるのか、横になればすぐに眠れる自信はある。頷いて、横になれば小唄も隣に

待て。

「ちよい待て。何でお前が同じベッドで寝ようとすんだ」

がば、と起き上がり、俺は寝ころびかけた小唄の肩を掴む。すると、小唄はえーと声を上げた。

「一日くらい良いっしょ。へるもんじゃなし」

「主に寝る場所が減る」

じつとりと、半眼で小唄を見つめる。何を考えてるかたまに解らない奴ではあるが、これほど訳の分からないことは滅多にない。

「……こーすりゃ狭くても平気だ」

にこり。爽やかすぎる笑みに気を取られた瞬間、体がぐいと引っ張られた。

一瞬何があつたか解らず、ややあつて小唄に抱きしめられた事に気付く。これは一体どういう事だ。

「おい……っ!？」

「倭ってけっこうあつたけーな」

俺の苦情なんて無かつたかのように、小唄は耳元でぼそぼそと囁く。少しくすぐったいのを堪え、俺は突き飛ばさないよう手加減して小唄を引き剥がした。

「悪ふざけは……」

「悪ふざけなんかしてない」

ほんの少し怒気を交えて食ってかかれば、小唄は動じることなく俺の言葉を遮った。一瞬、沈黙がその場を支配する。

「俺は、真剣だよ」

灰色の目が俺を映す。射抜かれるように見つめられて、俺は一瞬背筋にひんやりしたものを感ずる。

こんなのは、見たことがない。

不意に、小唄の手が俺の頬に触れた。一瞬びくっとして見上げる

と、すぐそこに、小唄の顔。

「……小唄？」

不安になって後退れば、小唄の表情が瞬時に変わる。それはもう、あの射抜くような目じゃなくていつもの小唄だ。

「ごめん」

口を開けば、いつもの小唄らしい声音で謝罪が飛ぶ。すぐに手が離されて、小唄は俺に背を向けた。

「……小唄、今の」

「忘れてくれ」

先程の不可解な行動について聞けば、小唄は背を向けたまま堅い声で呟く。こうなったら、たぶん向こうがその気になるまでは話さない。

「……小唄」

俺は少し寂しくなって、ほんの少し聞こえるくらいの声で呟いた。小唄がほんの少しこちらを見る。

「……寝ようか」

軽く袖を引っ張ると、小唄は少し複雑そうに俺を見た。それでもすぐに頷いて、小唄はそつと横になる。

それに倣うように俺も横になる。ちらりと隣を見ると、小唄と目があつた。

「おやすみ」

「ああ。おやすみ」

くしゃりと、頭を撫でられる。これは嫌いじゃないというか、なんとなく心地が良い。俺が寝るまで起きているつもりなのか、小唄は子供でもあやすように俺の頭を撫でる。

気がつけば、そのうちに眠ってしまった。

\* \* \* \* \*



「へえ、塾とか行つてんだな」

小唄の持つている鞆、そこについている有名進学塾のロゴを見て、俺は感心する。周囲には塾なんて通っている子供は居ないし、みんな夕方まで走り回って遊ぶのが普通だった。

「遊んだりしないのか？」

「あ……、えつと」

たぶん、普通の子供の質問なんだが、小唄は答えられないようだった。俺は少し困りながら、ふと思いついて小唄の手を握る。

「今日は塾、終わりなんだろ？」

「え？うん、帰るところだったんだ」

用事の有無を確認すれば、時間はまだある。ポケットの小銭をこっそり確認した後、俺は小唄の手を引いて歩き出した。

「ちよつとでいいから、遊ばーぜ。ついて来いよ」

「えつ、あ うんっ」

慌てて頷く小唄を連れて、俺は得意げに微笑んだ。

例えるなら、小唄にとってそれは冒険みたいな物だったかも知れない。駄菓子屋でアイスを買ひ、溶けないうちに近場の廃ビルの階段を上がる。

少し息が上がった小唄が、まだそこまで壊れていないビル内を見渡す。端にある椅子を引つ張り出すと、俺は窓の外を指差した。

「俺の秘密基地。ほら、こっからだと夕日がきれいに見えるんだぜ」

俺が示した先を見て、小唄は歓声を上げる。

それが、小唄にとって初めての「遊び」だった。

\* \* \* \* \*



## #010：仲間

目が覚めると、ベッドの中はとっくに俺一人になっていた。小唄は先に起きたらしい。

『おはようございます、倭さん』

ペンダントからセイムルダの声。おはようと一言返し、ペンダントを首にかけた。

「小唄は？」

『倭さんが起きる少し前に、朝食を運んでくると出て行かれましたわ。今、下の階でメニューを選んでみるみたいですよ』

たぶん、セイムルダには俺も小唄も何をしているのか見えているんだろう。となると、小唄にも俺が起きたのは伝わったのかもしれない。

着替えて待つっていると、程なくして小唄が皿の積まれたトレイを抱えて戻ってくる。

「お。ほんとだ起きてる」

にこにここと、嬉しそうに小唄が部屋に入る。手にしていたトレイには、料理がいくつも載っていた。朝食にしては量がなかなかある。「多くないか？」

「三人分だったら、こんなもんだろ。ほら、座れよ」

三人分　　そこでようやく、俺はもう一人の仲間を思い出す。昨日は夜だったからと会わなかった亜麻色の髪の彼女　　シエラが、隣の部屋にいるはずだった。

「　　あら、早いわね」

噂をすれば何とやら、思い出した瞬間、シエラがドアから顔をのぞかせた。

「倭君も、元気になったのかしら。いきなり倒れちゃって心配したわよ、もー」

「ごめ……ってわ、ちよっ！？シエラっ！？」

申し訳なくて謝ろうとした瞬間、顔全体を何かで圧迫される。次いで背中に回された腕で、シエラに抱き締められているのが理解できた、が。

この感触は明らかにヤバい、ヤバいだろ！思いつきり顔にダイレクトアタックされている。何がとかは聞くな。

「シエラー、倭が窒息するって」

あはは、なんて笑いながら小唄。窒息どころか鼻血の出血多量が死因になりかねない。ようやく離されて、当たっていた部分がどこかを再認識すると、顔が耳まで熱くなる。

「あら、意外と……」

「純真なのなー」

けらけらとからかいだすシエラと小唄を恨めしく睨みつけ、俺はまあまあと差し出された料理の皿を受け取る。美味しそうな匂いに流石に空っぽになっている胃が蠢いた。

「消化の良いもんばかり選んだつもりだけど、ちゃんと噛めよ。」

二日以上ろくに食ってないんだから」

「うん、サンキュ」

気を使っているいろと準備してくれたらしい小唄に、俺はほんの少し嬉しくなつて頷いた。こういう時のこいつの気配りは、本当にありがたい。

「じゃあ、いただきます」

全員が席について手を合わせる。シエラはここ最近で俺達の習慣が移ったらしい、手をあわせる必要がないのに合わせたりしていた。

食事を終えて、ひと段落。窓の外に身を乗り出し、俺はレダノの街並みを見渡した。

世界樹の麓よりも、舗装や建築物の整備がしっかりされている、整然とした街並み。話に何度か出てきただけの街の外観は、どこか

イメージにぴったりだった。

通りのほうを見ると、モダンな石畳にランプ式の街灯が並ぶ。昭和初期の、洋風の街並みそのままシフトしてきたような感じだ。

「レダノ公国はこのあたりでは比較的先進都市よ。領主の方針で、市民が自由に使える施設もかなり多いの」

「施設……って、公園とか、学校とか？」

街の説明をしてくれるシエラに、振り返って訊ねる。にこりと微笑むと、シエラは俺の隣に並んで外の建物のひとつを指差した。

「あれが、レダノ領主の城よ。中庭は一般解放されているわ。あつちちは、教会。それから向こうは、孤児院や学生用の宿舎が並んでるの」

それら全てが行政の資金から賄われているらしく、レダノに留学して学士を目指す人間はかなり多いらしい。俺達の世界でも似たような制度の国があつたな、なんて思いながら、俺は街を眺める。

「なあ、倭」

背後から、小唄が囁いた。何となく迷いが含まれているようなその声に、俺は振り向いて小唄を見つめた。表情はいつものまま、だ。

「昨日、シエラと話してたんだ。やつぱり、今の俺達二人だけここケイオスストーンれからも混沌石を探すのはかなり無茶だよ」

そこまで言うと、小唄はほんの少し俯いて「お前も倒れちゃったし」、と続ける。

実際、小唄のその懸念は間違いないだろう。ドラゴンに巨大ワーム これまでのいわゆるボス敵に値するやつらは、たぶんまだまだ存在するんだろう。それにここはゲームなんかじゃない現実の世界だ。俺や小唄がすぐに強くなることもできなければ、敵が俺達の強さにあわせて出てくるはずもない。俺達二人 特に俺の消耗は激しいはずだ。

「それでさ、シエラの提案なんだけど」

気がつけば全員ベッドの上で膝を抱えて向き合っている。子供の

秘密会議か。

「まず、シエラが俺達についてくるって」

「……へ？」

唐突すぎる話に、俺は目を丸くする。聞いてないぞそんな話。

「見てたら危なっかしいもの。それに、私は流れの傭兵だから特に目的地もないのよね」

いつもの天使の笑顔で、シエラ。ありがたいが、正直複雑だ。普通に考えて、彼女が一番混沌石に耐性がない。負担は俺なんかよりかなりあるはずだった。

「まあ、それはいいとしてよ。わたしが加わっただけでどうなるってものでもないから……もうひとり、仲間を探さない？」

仲間

その響きの意味をようやく理解して、俺はほんの少し俯いた。確かにそのほうが、今まで辛かった戦闘も楽になるんだろう。けど

「よく知らない奴を、巻き込んだりしていいのか？そもそも、シエラだって混沌石の影響を受けない訳じゃないんだ」

「……それは、俺も考えたよ」

俺の不安に、小唄は困った表情で俺を見つめる。それから、軽く肩を叩かれた。

たぶん、小唄の言いたいことは理解できる。俺達は弱いんだから、もっと周りに頼らないと駄目なんだって言いたいんだろう。

「……まあ、そのあと一人の仲間をどうするかは別の話でさ。シエラはついてくるってきかないんだよな」

頭を掻きながら、小唄がシエラを見る。ニコニコ笑うシエラを、説得する自信はたぶんない。

「……シエラはどうして、ついてこようなんて思うんだ？」

改めて、俺はシエラの目的を尋ねる。危なっかしいからなんて理由だけでついて来るには、この問題はなかなか重たいと思うからだ。

「……あなた達が危なっかしいってだけじゃ理由にならないかしら。……さらに理由をこじつけるなら、混沌石の調査には興味がある……」

…つてところかしら？」

にこにこ微笑みながら、シエラは「どう？」と首を傾げる。混沌石の研究なんて、ほんとはしてないんだけど……。

「……まあ、シエラがいたから大分いろんな情報が手に入ったのは確かだけだな」

困った様子で、小唄が呟く。そんなに情報あつたっけ？などと思いながら、適当に相槌を打つ。

「正直、仲間を増やすってのは重要だと思う。今までの二回にしても、混沌石はデカイバケモノの体内にあつたんだ。次もそうだっていう確率はかなり高い」

小唄としては、シエラが仲間になるのは賛成らしい。そりゃあ、俺が倒れたならそうなるよな。

「俺の考えでは、バケモノの体内に混沌石があるのはあいつらの防衛本能が何かじゃないかと思うんだ。見たところ、転移して増える以外は移動や防衛手段がないみたいだからな」

なるほど、そう言われてみると確かに納得できる。それにしてもさりげなく調査までしている小唄には感心せざるを得ない。

「まあそんなわけで、シエラが居るのは俺としては賛成。……倭は、どうだ？」

不意に意見を求められ、俺は一瞬答えに詰まる。この状況でダメとは言えないし、多数決ですでに負けている。セイルルードの意見は、シエラが彼女の事を知らない以上数にも入れられない。

それに、シエラが居てくれたほうがありがたいのは確かなんだ。なんだかんだ言つて、それなりに戦い慣れているんだから。

「……危なくなったら逃げる、って約束してくれ。もちろん俺たちだつて、逃げるけど」

「もちろんよ。なら、ついて行っていいのね？」

ニコニコと微笑むシエラに、俺は苦笑して頷いた。

仲間を探す　なんて言ったのはいいが、俺達は基本的にこの世界の仕組みを全く知らない。酒場で情報を集めようにも、どこにどんな街があつてどんな組織があるかなんて知りもしないわけで。

そうなると、頼りに出来るのはシエラしかない。とはいえ彼女も大したアテがあるわけではないらしい。

「まあ、しばらくは混沌石の情報を探していくしかないよな。なんだっけ？レダノの特務が動いてるなんて話があつたよな」

随分前に世界樹の麓で聞いた話を、小唄が掘り返す。シエラがああ、と反応するのを見るに、小唄はそれを狙つたみたいだ。

「一週間以上前に聞いたけど、そのあとの消息、聞かないわね。今朝聞いた話じゃ、ミルダ渓谷やクラダ草原が復活したのは彼等の功績だなんてデマが流れてるけど……」

どう考えてもそれは俺達が実行したことなだけに、飲んでいた紅茶を嘔きそうになる。なんとか堪えているものの、なんか喉が苦しい。

「一応この周辺にある混沌石の情報はかなり集まつたから、なんかヤバくなさそうなところからおさえてく？」

乾いた笑いを浮かべながら、小唄。言いたいことは解るけど、堪えとけ。

「……というか、特務の人間がどこに行つたかも探るべきじゃないかしら？ひよつとしたら、良い戦力になるかも知れないわ」

唐突に、シエラはとんでもない提案をする。ひとつの街の軍隊を味方にしようなんて、実にシエラらしい考えな気もするけど……無茶だつて。

「……仲間は無理にしてもさ、一応調べてみるのはアリかもな？もし、混沌石にやられて動けなくなつてたりしたら大事だし、そうでなくても見かけたらいろいろ話を聞けるかも」

これは小唄の意見。確かに俺達にしか破壊できない混沌石を破壊すれば、もし特務とやらが動けなくなつても助けることは可能だ。だつたら、その特務の行方を捜査するほうが良いとは思つ。



現状、セイムルーダの弱った霊力では、普段から出来ていたらしい「世界を見渡す」事が出来ないらしい。霊力の流れが断ち切られているからとか、難しい事を言われたがとにかくフルパワーにならないんだとか。

「特務の方々の助けに行くのは、わたくしも賛成ですわ。シエラさんの言うとおり、戦力になる可能性は高いですから」

タイミングよく、セイムルーダの声が頭に響く。最近あんまりにも寡黙だから、たまに喋られると反応に困ったりする。

「じゃあ、手分けして特務の情報でも探すか。……とはいっても、倭は頼りないから俺とシエラで話を聞くしかないか」

小唄がごく自然に切り出す。頼りないなんて小唄には言われたく無かったが、こと頭を使う作業は向いていないだけに文句は言えない。

結局、一旦街に出て噂話から情報屋までしらみ潰しに当たることになった。

とは言え、人が多い街では意外とそれらしい噂話がまことしやかに流れている。俺と小唄が出来るだけ集めた情報は、かなり突飛な内容から実際にありそうな話まで様々だった。

霊力の戻ったミルダ渓谷にドラゴンの遺体が見つかって、それを倒したのが特務だ。なんて噴飯もの話から、実は特務は神の使いだの、レダノには神が居るだの、ぶつちやけ小学生でもそんな妄想はしないだろという噂が殆どだ。

そんな中、直接関係ないけど。なんて言いながら、最後に入った酒場のマスターが変な話をしました。

「レダノ公国特務の代表は結構な美男子なんですがね、彼が混沌石の調査任務に出た次の日から、シエーラ姫が失踪したんだとか」

シエーラ姫って？と聞こうとしたのはこらえた。流石に、聞いただけでどういふ地位の人間かはわかる。

「シエーラ姫と特務隊長のアセラは恋仲だつてウワサでね。ふたりが駆け落ちしたんだとか、姫が隊長を追っかけて家出したんだとか、そんな噂が流れてんです」

「ご苦労な姫もいたもんだ。万一それが本当ならふたり揃って共倒れなんてこともありえそうだ。」

結局、俺達はろくな情報も得られずに宿に戻る。先に帰っていたらしいシエラが、妙に上機嫌で出迎えて吉報を告げた。

「特務の動き、掴めたわよ！」

## #011：特務隊長と姫君

夕飯を注文して、宿の食堂の目立たない場所に座る。上機嫌なシエラが、まず最初に話を切り出した。

「ふたりは、何か手がかりを見つけた？」

俺と小唄こづたは、ちよつと気まずそうに首を振る。さして気にしていない感じで、シエラは「なら私から」と微笑んだ。

「ちよつと危ない情報屋に掛け合ってみたら、領主が特務に命令した内容が解つたのよ。小唄くん、地図はある？」

どうやらシエラは俺達なんかより、この街に詳しいらしい。なんだが一瞬とんでもないことを聞いた気がすると思いつつ、小唄を見る。どうやら小唄はすでに食べ始めていたらしく、海老フライを口に加えたなんとも間抜けな状態でポケットから地図を出した。

「ここが今の場所、レダノ公国。で、特務が向かった先は……ここらしいわ」

ちよん、とシエラが指差した場所を、俺達は見つめる。街道らしき線で繋がれた、レダノともうひとつ違う街とのど真ん中。

「ライン公国との国境よ。ここに　　というか、ライン公国の近くに混沌石ケイオストーンがあるらしいの」

シエラの話では、ライン公国とレダノ公国は友好関係にあり、レダノは数週間前からラインとの交流が断たれていることを重く見ていたそうだ。他にも周辺国家　世界樹の麓だとか、近隣から孤立しかけてはいたらしい。

「ま、あんまり混沌石を放置すると困るんでしょね。この国は海がないから、貯水池を近くに作っているの。表向きは平穩無事に見えるけど、いつ混沌石が転移してきてもおかしくないわよ」

確かに、世界は俺達がのんびりしている間にも混沌石に分断されて行っている。たまに、セイムルーダが『靈力マナの反応が消えた』な

んて呟くから解るんだが。

混沌石については、今のところ情報がかなり少ない。セイムルーダも自力で調べられたのは、俺達に説明したことだけが全てらしい。一体どこから生まれるのか、どんな基準で転移し出すのか、そんなところは残念ながらわからない。

地球<sup>テラ</sup> セイムルーダがそう呼んだ俺達の世界も、今まさにこんな危機に見舞われているんだろうか。想像がつくようでない。

けど、セイムルーダは俺達を元の時間のあの場所に戻すって、約束してくれた。今考えるべきは、この世界の混沌石を必要分ぶち壊すこと。そしたら、俺達は帰るんだ。

「で、このあたりにはかなり大規模な水脈……というか湖があるの。運河も通ってるわ。けど、混沌石があるとしたら今頃ライン公国は悲惨な状態かも知れないわ。この運河と湖以外、水の供給は海水のみ……とてもじゃないけど、飲み水すら賄えない」

違う地方から来たという俺達のために、シエラはいろいろ説明してくれる。なかなか深刻そうな状況に思えて小唄を見れば、奴は暢気にサラダをばくついている。気が抜ける。

「倭<sup>やまと</sup>、食わないのか？」

「話の最中に食べるお前がすごいよ。なんかイメージ違うぞ」

ジト目で見れば、小唄は「だって喋り疲れた」なんて言う。ようは、情報収集を任せっきりにしたのをぼやきたいらしい。回りくどいやつ。

「……で、そこに行くんだよな？なんか、出る……って噂はなかったのか？」

食べるのをやめて、小唄はシエラに訊ねる。小唄にしてみれば、怪物とやりあうのはできる限り避けたいらしいが。

「いる、かどうかは解らないわ。でも特務は十数人で向かったって聞いたから、覚悟はしておくべきよね」

溜息を吐いて、シエラはようやく料理に手をつける。それに倣うように、俺も目の前の食事に手をつけた。

遠くまで続く街道の真ん中、足元に崩れ落ちた向日葵みたいな魔物を最後に戦闘を終わらせる。混沌石とは関係なく、このあたりは原生の魔物が多いらしい。

「なかなか剣裁きが板についてきたわね」

短剣を鞘に収め、シエラがあたりを見渡す。敵がいないのを確認して溜息を吐くと、俺も剣をしまった。

さりげなくマンガなんかで読んだ握り方や構え方は、半分以上は役に立たなかつたんだけど、全く役に立ってないわけでもない。普段から筋トレだけは欠かしてなかつただけに、剣を振り回すのはさほど苦でもなかつた。

「こんだけ敵がわらわら出てきたら、そりゃあな」

肩をすくめ、ふと隣の小唄を見る。相変わらず後方から魔法で支援している小唄も、最近は体力を回復したり傷を塞いでくれたり、なかなかサポートが充実している。が、未だに技名を言うのが恥ずかしいのか「倭く大丈夫か！」だとか、「シエラがんばり！」だとかで魔法を発動する。いくら呪文がなんでも構わないからって、いちいち気が抜けるんだが。

それでも小唄のサポートはありがたいから、文句は言わない。というか、言えない。

「怪我してないか？大丈夫？」

「大丈夫」

それにしたって、小唄は朝から様子がおかしい。事あるごとに俺にべったり張り付いて、やれ疲れてないかとかやれ怪我はないかとか。一時間に一回なんてレベルじゃなくて、敵がでた後は必ずだ。シエラが話題を変えたりしてくれても、さすがにそろそろ振る話題もない。

「ほんとに大丈夫か？無理するなよな」

「だから、大丈夫だし、まだ余裕だよ。治療が必要ならすぐ言う」

ややうんざりしながら、それでも文句は言わない。小唄は小唄なりに不安も沢山あるんだろうから、ちょっとくらいなら我慢……  
「でもやっぱ心配だよ」

我慢……できるかな」。

一体小唄は何がそんなに心配なんだろう。俺はぴんぴんしてるし、逆に混沌石が近づいてきたシエラのほうが辛いんじゃないかとすら思えるのに。

「ふたりとも、夫婦漫才はもういいから前を見て」

呆れた口調で、シエラ。夫婦漫才ってなんだよと突っ込もうとしたが、シエラの指す方角を見て俺は絶句した。

街道のど真ん中に、でっかいクレーターがあった。

正確にはそれはクレーターじゃなくて、湖だった場所らしい。街道に繋がる位置にはそのまま木造の通路が対岸まで伸びているが、所々崩れ落ちていて、とても安心して渡れそうもない。

「相変わらず出鱈目に靈力吸い上げてんな……」

小唄が呆れたような声で呟いた。余りに広大なクレーターは、もとの湖がかなり大きいことを示していた。その基準で行けば、小唄の感想もけて大袈裟じゃない。この広大な場所に東京ドーム何軒収まるんだろう。

「混沌石自体はたいした大きさじゃないのにね」

肩をすくめ、シエラはそっと崩れかけた歩道に足を踏み出す。軽く踏みしめて歩けるかを確認すると、大丈夫と呟いた。

慎重に、木造の足場を歩く。絶対いつか崩れそうなんだが……

「近いですわ。きつとこの湖の中です」

唐突にセイムルーダの声が頭に響く。彼女が近いと言うなら確かなんだろうが 見渡す限り、なにも見当たらない。

「……どこだ？」

「……倭くん？」

辺りを見回す俺に、シエラが不思議そうにしたあと「あるのね？」と問いかける。無言で頷いて、俺は小唄のほうを見る。

「……やっぱ、下におりなきやダメ？」

引きつった笑顔で、小唄。物わかりは良いが、腰が引けているのが情けない。

「降りれる場所を探そう」

「わかったわ」

俺の提案はあっさり受け入れられた。どうにか安全に下りる場所を探すなかなか見当たらない。結局、崩れかけた場所の柱を下りる。

ささくれた木が手のひらに刺さって、なかなか痛いのを我慢する。降りきつて土を踏みしめたが、湖の底にいるとは思えないくらいばさばさだ。

「本当に、どこに」

何もない場所に、溜息を吐く。もしかするとまだまだ遠いのかも知れない。たまにはセイムルーダも間違ったり

『西ですわ』

しなかったらしい。はつきりと方角を言われ、俺はペンダントに浮かんだ矢印のほうを向いた。

「あつちだ」

よくよく見ると、西らしい方角はその一角に小さな山みたいな場所がある。水が戻れば、一番上くらいは島みたいに残るかも知れないそこには、あつらえたような洞穴があった。

「狭そうだな……けど」

『その奥から、混沌石の気配を感じますわ』

やはり間違いはないらしい。小唄に目をやれば、溜息を吐いて両手を前にかざした。

「明かりよ」

なかなか様になってきた<sup>スベル</sup>言霊が、煌々とした明かりを小唄の手に生み出す。それを片手の上に浮かせたまま、小唄は中の様子を伺った。

「……入れないことは無さそうだ」

心底嫌そうに、小唄が呟いた。

まだ湿気を帯びているらしい洞穴は、良くは解らないがぴりぴりとした空気に包まれていた。敵がいると考えれば納得いくのに、何故か気配らしきものはない。

洞穴は中に入ればなかなか広く、地中へ深く続いていた。この中に水が入っていたと思えば、まだ漂う湿気も理解できなくはない。「……だいぶ、近いのかしら？少しきついわね」

最後尾で歩くシエラ言葉に、俺と小唄は慌てて振り向く。護符をつけているとはいえ、シエラは混沌石の影響を受けている。彼女の霊力は今もゆっくりと吸い取られているわけで……。

「無理するなよ、シエラ」

小唄が気を使って手を差し出す。大丈夫とそれを断り、シエラはふと俺たちを不思議そうに見た。

「前から気になってんだけど、ふたりは影響を受けてないのかしら？」

「……」

返答に、詰まる。小唄も同様らしく、隣を見たら視線が合ってしまった。どうしよう　そう思っていると、話を振ったシエラ本人がきよろきよろとあたりを見回した。

「声がするわ」

どうやら、シエラにとってはそちらのほうが気にかかるらしい。進んでいくと、分かれ道にさしかかった。

「あっちかしら」

暫し迷いながら、洞穴を進む。狭くなっていく道の終わりは、唐突だった。

視界が開ける。ドームのようなその一角は、人間が百数人余裕で入りそうな広さを有していた。一部には鍾乳石なんかも出来ており、かなり昔からこの空間は存在していたようだ。



「……誰かいる」

その場所のど真ん中で、対峙する人影がふたつ。この場所に立っていられるのはそのふたりだけらしい、周囲には兵士のような人間たちが数人、倒れ伏していた。

「もしかなくても、あれって　ておい、シエラ!?」

ふたつの人影に走り寄り寄るシエラを追いかける。どうにも様子がおかしいと思っていると。

「アセレア!」

切羽詰まった叫び。シエラの叫んだ名前は、確かに聞き覚えがあった。そして

「シエーラ!? 何故こんな場所に」

こちらに背を向けていた、青い髪 of 青年が振り返る。女と言われども違和感がない、整った顔立ちの美男子だ。あれが間違いない特務隊長　なんだろう、が。

「シエーラ……って、言ったよな? シエラのこと……」

俺と同時に思わず立ち止まった小唄が、啞然とした様子で確認する。

確かに言った。あの美形は、シエラを「シエーラ」と呼んだ。少なくとも今の状況でその名前が示すのは　レダノ公国のシエーラ姫しかない。

「危険です、逃げて下さい。　混沌石に当てられて動けなくなります」

当然シエラが護符を持っていることを知らない彼　アセレアは、シエラを制止する。けれど、目の前にいる相手への警戒も怠っていない。

「　ふん、やはりお前は女に入れあげて国を捨てたか。ルノーの仲間達が知ったら一体どんな顔をするやら」

唐突に、アセレアと対峙していた相手が呟く。その手には、藍色に輝く石

「混沌石……!?!」

紛れもなくそれは、混沌石に他ならなかった。けど、あの石を手にして影響を受けていないなんて

「カーク、私達は騙されていただけです！その石を使って平和を取り戻そうなんて、馬鹿な考えは止めて下さい」

アセラアがカークと呼んだ男は、警告に耳を貸してはいなかった。猫のような目を細め、混沌石をしまい込む。どうやら、壊す気はないらしいが

「いけません、あの人は混沌石をどこかへ運ぶつもりですわ！そんな事したら」

セイルルダの言いたいことは、良く解った。

混沌石を運ぶ。それは、世界中の霊力を石に注ぎ込むことと同じである、と。

## #012：嘘が招く罠

「部下を放置して俺を追いかけるか？お前ならやるだろうな」  
立ち去ろうと構えている男に、アセレアは無言で一歩を踏み出す。  
ふたりの気迫は俺達なんかにはついていけないような、桁違いの「  
何か」がある。けれど、だ。

「待て！そいつをどうする気なんだ!？」

飛び退き立ち去ろうとした男に、俺はできるだけ全速力で走り寄って叫ぶ。あいつどころか、アセレアの近くにすら近付いていないけど……。

「子供がしゃしゃり出る問題じゃない。巻き込まれたくなければ消えることだ」

アセレアがカークと呼んだ男は、俺にそう言って踵を返す。追いかけてやろうとするも、その一瞬で

「なっ……、なんだあいつ……!？」

小唄こづたが驚くのも無理はない、逃げ出したあいつの足の速さときたら、全力を出した俺にすら追いつけないくらい素早くて。

寧ろ、追いかける前に確実に間に合わないくらい遠くまで行ってしまっていた。

「……恐らく誰にも追いつけないでしょう。あれの足の速さは、故郷の誰もかなわなかったほどです」

溜息を吐いて、アセレアが手にしていた剣を鞘に収める。かなり細身の剣は、多分フェンシング用だ。

「しかし あなた方は何故ここへ？それに、混沌石が近くにあるのに何故立っていられるのですか？」

振り向いてこちらに近寄ったアセレアは、厳しい表情のなかに困惑の色を見せていた。特に、その視線はシエラに比重が置かれている。怒り半分、残りが困惑なんだろう。言葉を探している様子

で、暫し沈黙があたりを支配した。

「……貴方が何も言わずに任務に出てしまったから、追ってきたのよ」

漸く口を開いたのは、シエラだった。それから、向こう側で溜息。手のひらで顔を覆い　　というよりこめかみに手を当て、アセレアは頭を振った。

「陛下がお聞きになったらどれだけ嘆かれるか……貴方は自分の立場を解っていらっしゃるんですか？」

どうやら、シエラが件のシエーラ姫であることは間違いないようだった。今にも口論を始めてしまいそうな二人の間に、意外にも小唄が割ってはいる。

「とりあえず、ふたりともお互いに心配しあってるんだよな？変な喧嘩はしないで、とにかく一旦ここから出ないか？」

まさかあんだひとりで、ここにいる兵士さんを全員運べるわけないだろ？」

無理にシエラとアセレアの視界に割り込んで、小唄は周囲で倒れ込んでいる兵士たちを示す。そこでようやく、ふたりは沈黙した。

「……身内を贖済するようで悪いけど、小唄の言うとおりだよ。こんなところで言い争ってる場合じゃない」

小唄の両脇で沈黙するふたりが、互いに目を合わせた。それから、ふたり同時に溜息。

「……確かにあなた達の言うとおりね。意味のないことはやめましょ」

「……お恥ずかしい限りです。」

ひとまず、兵を介抱しましょう　　多少<sup>マナ</sup>靈力を与えれば動けるようにもなるはずですよ

漸く、重い空気がなくなつた。それに安堵して、俺達は倒れている兵士たちを介抱しはじめた。

それはまさに、中世や洋風ファンタジーなんかに出てくるお城だった。

大理石のようなものが張り巡らされた床に赤い絨毯、広い空間に間をおいて並べられる、凝りに凝った調度品。天井には一面に、随分と色褪せた絵画がそのまま施してある。そのせいも、真つ白だった外からの外観とは逆に古さを感じさせる。

とにかく荘厳なんて言葉がやたら似合うここは、レダノ公国の領主が住む城だ。

「場違いな感じがする」

ぼそりと、小唄が呟いた。実際、それは事実だ。今の俺や小唄は服装も庶民的だし、そもそもがこの世界の人間ではない、完全な部外者だからだ。

「一般人が入れる場所ではありませんからね。とはいえ、貴方達にはいろいろ話を聞かなければならない」

背を向けたまま、アセラア。言い方は優しいけど間違いなく、俺達は客ではないってことだ。それははじめから解っていたけれど、シエラがここにいないのはどういう事なんだろう。

「入ってください。シエーラ……いや、姫は後で参ります。どうせ、陛下に説教されているんでしょう」

俺の疑問に答えながら、アセラアはいくつかある部屋のひとつを示す。並んでいる部屋にはみんな似たような銀のプレートがついていて、内容は解らないが文字が書かれている。この部屋が何をやる場所か示しているんだろう。けれど、俺達にはわからない。

意外にも、先に部屋に入ったのは小唄だ。こんな時ばかりは堂々としてるんだから、時々驚く。あいつにはヘタレな時とそうでないときの基準がある、らしい。その基準は良くは解らないが、乱闘とかになると間違いなく後込みするくらいは俺にもわかる。

「……会議室か」

部屋の内装を見て、俺はこっそり安堵する。よくドラマなんかである拷問室だとか警察の事情聴取の部屋みたいなところを想像した

りしたんだけど、良く考えなくてもいきなりそんな事があるはずがない。

「座ってください。姫が来るまで、お茶でも頂きながら待ちましょうか。作り置きの不味いコーヒーですが」

部屋に入ると、それまで厳しい表情だったアセラアが優雅に微笑んだ。どうやら、さっきまでは人目を気にしていたってことだろう。それにしても、こんな風に笑われたら別人みたいだ。

良くも悪くも、アセラアというこの男の人は「きれい」だ。ウエーブのかかった水色の長髪に、同じ色のガラスみたいな目。男らしい体格ではあるけど、見る角度によっては女の人みたいに見える。

意識しているのか、容姿だけでなく衣服まで品が良い。ぱつと見には、完璧そうな人物だ。

その彼が勧めてくれたコーヒーを、俺は悪いと思いつつもパスした。ガキっぽいと言われそうだが、どうもあれだけは苦手なんだ。

「なら、紅茶のほうがよかったですでしょうか？お煎れしますよ」

「いえ、お構いなく」

気を使っているらしいアセラアには悪いと思うけど、そんなに喉もかわいてないから断った。それに、こんな場違いな場所にいてモノを口にするのはなかなか辛いものがある。

「それは残念です。これでも紅茶の煎れ方には自信があるのですが……」

苦笑して、アセラアは自分のコーヒーに口を付ける。そこで、ふと静かなことに気がついた。さっきから俺とアセラアしか会話してない

理由はすぐに解った。俺の隣で座っていたはずの小唄は、なぜかこの短時間ですっかり眠っている。それがおかしいことはすぐに理解できた。

「小唄さんは疲れて眠ってしまったんでしょうか」

何食わぬ顔で、アセラアが微笑む。けれど俺は小唄がこんな所で

いきなり寝るはずがないことを知っている。

「小唄は寝付きが悪いんだ」

多分、その一言で十分だったらしい。アセレアから笑顔が消えた。無表情のままこちらを見据えると、青い目がそつと伏せられた。

「困ったな、読みが外れたようです。まさか貴方のほうが騙されないだなんて」

あっさりと白状した瞬間、俺は一瞬でアセレアの下に組み伏せられていた。そのタイミングで、ぞろぞろと兵士が部屋に入ってくる。完全に、はめられた。なんでこんな事になっているかは解らないが、今解ることはひとつ。

俺達は敵に囲まれていたんだ。

「どづいつつもりだよ？」

地下牢らしき場所の檻。その外にいるアセレアを、俺は睨みつけた。

あれから結局、俺は抵抗もままならず地下牢に放り込まれた。武器や荷物はすべて押収されて、逃げようにもなにもできない。

目ざといことに、セイムルードとの連絡手段だったペンダントとピアスマで押収されたのだからかなわない。あの二つが何か解らなくても、あいつらにとって脅威になりかねないという判断はついたらしい。

アセレアという男は、策士としても相当の能力を持っているようだった。

「しばらくおとなしくしていただきたいのですよ。承諾して下さいなら、きちんと客室にもてなします」

俺の睨みなんか意にも介さない様子で、アセレアはにこりと微笑む。出会ったときはこの笑顔で良いひとだなんて思ってしまったが、今となっては憎たらしくてたまらない。

それに、こいつはシエラの好きな相手だって聞いた。なのにどう

して、こんな事を　？

「何故こうなっているかわからないと言いたげですね」

俺の表情から意図を汲んだのか、アセレアは壁に寄りかかってどこか遠くを見る。

「あなたがたの研究は、危険だからです。混沌石など、研究して良いものではない」

それだけだと言いつ残し、アセレアはさっさと歩いていく。去り際に、良く考えるようにと言いつ残して。

しんと静まりかえる。小唄は違う場所に連れて行かれたらしく、俺が今入れられている牢にはいない。隣にも沢山牢はあつたけど、連れてこられた時点ではひとりだった。後回しにされたのか、それとも違う理由か。それは解らないけれど、引き離すつてことはそれだけ警戒されているんだ。

アセレアの言っていた俺達の研究とやらは、多分最初にシエラに話した小唄のでっち上げに違いない。否定しようかとも思ったけれど、多分今更嘘だなんて言っても信用されないだろう。小唄みたいに口の上手い訳じゃない俺が何を言っても、おそらく無駄だ。

今更ながらに、俺は小唄に頼り切っていたことを自覚する。あいつなら今頃誤解を解いてくれたかも知れないのに、今はどこにもいやしない。

「……大丈夫かな」

現実を直視してしまうと、途端に不安になる。いつまでこんな所で、独りぼっちなんだろうか。回収されたセイムルードのペンダントとピアスは戻ってくるんだろうか。シエラはこのことを知っているんだろうか。

唯一、天井付近にある小さな窓を見上げた。外はもう随分暗くて雨なんか振り始めていて

溜息を吐いて、俺は簡素なベッドの上に座り込んだ。



かつかつと、靴が石畳を踏み鳴らす。数時間前から耳にしているその音は、巡回中の兵士だ。

最初にそれを確認した後は、もう見る気もなくなった。現実を見たくないからだ。最悪なことに俺の精神力は現実逃避には向いていないんだけれど、見ないくらいの選択は出来る。

膝を抱えて、ずっと俯くのも疲れた。もう、余裕で一日は過ぎた。いつまでこんなところに閉じ込めて置くつもりなんだろう。

「倭」

見回りがいなくなつて暫くたたただろうか。不意に、潜んだような声が俺を呼んだ。

その声を聞き間違えるはずがない。間違いなく、小唄だ。

「小唄？どこにいるんだ？」

「こつち、こつち」

姿の見えない小唄の声に、俺は狭い牢の中を見渡した。程なく、窓の外に見覚えのある金髪を確認する。

「大丈夫だったのか」

俺一人の状況は変わらないものの、小唄の声と顔を確認してほんの少し安心する。けれど、小唄が外にいると言うことは、逃げ出したという事なんだろうか。

そんな事を考えていると、がこつと無機質な音がして窓についていた鉄柵が外れる。そうそう簡単に外れるものでもないだけに、ぎよつとする。

「今の、一体」

「いいから、上つてこい」

どうやって外したのか聞くものの、小唄は時間が惜しいのか俺を急かす。垂らされた縄梯子を掴んで、俺は狭い窓に体を潜り込ませた。

窓の外は、城の庭に当たる場所らしい。整えられた芝生に手をついて、見回すと

「シエラ？」

俺の腕を掴んでいる小唄のすぐ横に、亜麻色の髪の美女がいる。彼女はあの天使みたいな笑顔で微笑み、俺の腕を掴んで窓から出てくれた。

「ごめんなさいね、まさかアセラアがあんな事をするなんて」

牢から這いだした俺に荷物を渡しながら、シエラは頭を下げる。

彼女の性格を考えると、やっぱり俺や小唄を捕まえたのはアセラアの独断なんだろう。少しも疑わないわけじゃなかったけど、小唄と一緒に助けに来てくれたのだから、信用はできるはずだ。

「あまり時間がないわ。気付かれないうちにここを出ましょ」  
話はそれから。そう言っつて、シエラは軽くウインクした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2298h/>

---

異世界へよーこそ～Door to Sameruda～

2010年10月10日01時02分発行